Passerelle Report

中国・四国ブロック広域支援センター
令和２年度 事業報告書

なんでそんなんエキスポ展示より
「傾斜角マイケルなみ」
行為者：アキマサ　発見者：大野雅孝（父）

Passerelle Report

中国・四国ブロック広域支援センター
令和２年度 事業報告書

北添 紫光

今思いおこして みて僕が初めてアートに触れた瞬間は
保育園児の時に粘土やブロックで遊びながら口ずさんでいたハナ歌を
父に褒められた、その時だった。

粘土やブロックで街や生き物を作り、その中で偶発的に物語を作っていく。
僕の遊びは大体そんなものだった。
僕はとても寂しがり屋だったから、いつも街は沢山のキャラクターで溢れていた、
そしてそのキャラクター達の全てにテーマソングがついていた。
そして彼らが物語を紡ぐ時、そのバックにも音楽が自然と流れていた。
僕はそれらをハナ歌として歌っていたが音楽家である父北添哉は、それを大変好んだ。
そしてある日に僕に一言言ったのを僕は今でも鮮明に覚えている、
『おまえが遊んでいる時のハナ歌、あれ 結構 スゴイけどな』。
厳しかった父とはそれ程話をした事はなかった。父が近づいてくる、
それは僕にとって怒られる、または何か良くない事が起こる前兆ですらあった。

しかしその一言をかけられたその瞬間、ホッとするような嬉しい気持ちで
いっぱいになった。
父とその「ハナ歌」を通じて、人として対等に繋がれた気持ちがしたからだ。

人間には多くの違いがある、だからこそ素晴らしい。
しかしその違いを真の意味で享受するには、
共通する何かが必要だと感じる事がある。
それは人としてお互いを認め合う心だ。
アートは生まれや貧富の差、立場の違い・背負ってる物等
色々なものの影響を受けるかも知れないがそのどれにも隷属しない。
アートにはそれを感じるもの同士を対等につなぐ、
そんな力があると思う。

Shiko Kitazoe

中国・四国 Artbrut Support Center passerelle コーディネーター。
1979年高知生まれ、高知県在住。地元高知大学卒業後に会社員として就職し働いていたが、就職4年目26歳の時に父親が他界したことをきっかけに、本当にやりたい事をやると決意、音楽家を目指す。様々な演奏・創作活動を経て、日本各地での演奏やドイツでの定期演奏、楽曲提供や打楽器演奏の審査員、そしてオリジナル作品の発表等、活動の幅を広げている。

はじめに

当法人は就労継続支援 B 型事業所や特定相談支援事業所などの障害福祉サービスや高次脳機能障害支援普及事業などの事業に携わっており、日頃は障害のある方の支援を行っております。2020年4月に2020年度障害者芸術文化活動普及支援事業を受託し、「中国・四国 Artbrut Support Center passerelle」が正式に誕生し、この1年間、中国・四国ブロックの障害者芸術文化活動広域支援センターとして中間支援を実施してきました。今年度の大きな取り組みとして、2021年2月に開催した「なんでそんなんエキスポ」があります。この事業は私に多くの気づきを与えてくれました。応募いただいた事例の中に「傾斜角マイケルなみ」という事例があります。この事例は、行為者のアキマサくんが動くキッカケを掴むときに、全体重を介護者にかけて身体を預けてくる。その預け方は、月日を経るごとに角度を増しており介護者である父親が「傾斜角マイケルなみ」と命名して応募してくれました。まさに、全国手をつなぐ育成会連合会の久保厚子会長の言葉にある「家族は大変だけど、不幸じゃない」を目の当たりした事例でした。この事例を見た時は心があたたかくなり、やさしい気持ちになったことを記憶しております。私たちは日々、生産性や合理性などを必要とする社会で生活をしています。また、支援の中でも障害がある人に求めている場面も存在します。そのような社会で生活している人たちがふと、ヒト本来のやさしさや〝生産性じゃない大切な何か〟に気づく体験が「なんでそんなんエキスポ」の中にありました。そして、障害者の芸術文化のあり方や障害者支援のあり方を改めて考えさせてくれる貴重な経験となりました。本書が手に取る方々の気づきに寄与する一冊になれば幸いです。

中国・四国ブロック障害者芸術文化活動広域支援センター
中国・四国 Artbrut Support Center passerelle
センター長　岡村 忠弘

もくじ

3 **エッセイ** 北添紫光

4 **はじめに** 岡村忠弘

中国・四国ブロックの各支援センターの取り組み

6 **鳥取県** あいサポート・アートセンター

12 **島根県** 島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

16 **広島県** 広島県アートサポートセンター

20 **徳島県** 徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

24 **愛媛県** 愛媛県障がい者アートサポートセンター

30 **高知県** 藁工ミュージアム　分室

中国・四国ブロックの支援センター未設置県の取り組み

36 **岡山県**

38 **山口県**

39 **香川県**

40 エッセイ
「くくり」を捨てる「ススメ」 土谷 享

46 座談会
「なんでそんなんエキスポ」って いったいなんやったん座談会

58 あとがき
僕は明日の過去である 岡村忠弘

表紙：なんでそんなんエキスポより
『ガムテープのタネ』 行為者：村木実乃里　発見者：ぬかスタッフ

Art
美術分野

鳥取県
あいサポート・アートセンター

当センターが運営する美術館「くらよしアートミュージアム無心」にて、年間を通して県内外の魅力ある作家の作品を紹介する展覧会を企画・開催することをメイン事業に、障がい者の文化芸術活動に対する関心がより高まることを目的とした事業に取り組みました。

企画展・ワークショップの開催

事業内容

今年度は、全5回の展覧会を企画・開催し、県内外の作家の作品を紹介しました。10月～11月の展覧会では、関連企画としてワークショップを3回開催しました。

①企画展「神戸からの風　こころのアート展」

こころのアート展とは、障がい者の個性豊かな芸術性に光を当てる兵庫県の公募展です。本展覧会では、こころのアート展開催当初から今までに出展した作者のうち、9名の作者を選び、それぞれの作品を会場で展示しました。

本展（会場：くらよしアートミュージアム無心）
2020年4月14日（火）～5月17日（日）
※4月18日～5月8日まで緊急事態宣言により休館

本展（会場：倉吉未来中心アトリウム1階みらいアートギャラリー）
2020年4月11日（土）～4月29日（水）

巡回展（会場：とりぎん文化会館 展示室）
2020年5月20日（水）～5月26日（火）

再展示（会場：くらよしアートミュージアム無心）
2020年6月1日（月）～7月12日（日）
※緊急事態宣言で展示期間が短くなったため、再展示を行いました

協力：公益財団法人こうべ市民福祉振興協会
来場者数：本展33名（11日間）/ 巡回展75名（6日間）/ 再展示266名（36日間）合計374名

成果・課題：

○来館が難しい方のために、SNS 上（# お家で無心）で作品を紹介する取り組みを始めました。作品投稿時には、閲覧者数も伸び、多くの人の目に触れていることが分かりました。

○新型コロナウイルスの影響により、観光客が激減したため来館者数も大きく減少しました。観光客だけではなく、今まで以上に県内の方に美術館やセンターの取り組みを知っていただき、来館に繋がるような工夫が必要だと感じました。

②企画展「古久保 憲満個展　饒舌な街」

滋賀県在住の作家、古久保憲満さんを紹介する展覧会。幼い頃から絵を描き、現在では作品が世界的に認められるようにもなり、国内外問わず様々な場所で展示されています。本展覧会では、幼い頃に描いた作品から近年制作されたものまで計17点を展示しました。

会場：くらよしアートミュージアム無心、倉吉未来中心アトリウム1階みらいアートギャラリー
2020年9月4日（金）～ 10月4日（日）
来場者数：合計471名（27日間）

成果・課題：

○9月5日、6日に倉吉未来中心で開催された「日本博を契機とした障がい者の文化芸術フェスティバル in 中国・四国ブロック」と同時期開催ということもあり、本展覧会と併せて質の高い作品を数多く紹介することができました。会期中は、誘導地図を置くなどして、両方の展示を見ていただけるように案内を工夫しました。

○アンケートより、作品の解説（作品が何を表しているのか、どんな思いで描かれているのかなど）があると良かったという意見がありました。今後、展示方法をさらに工夫していきたいと思います。

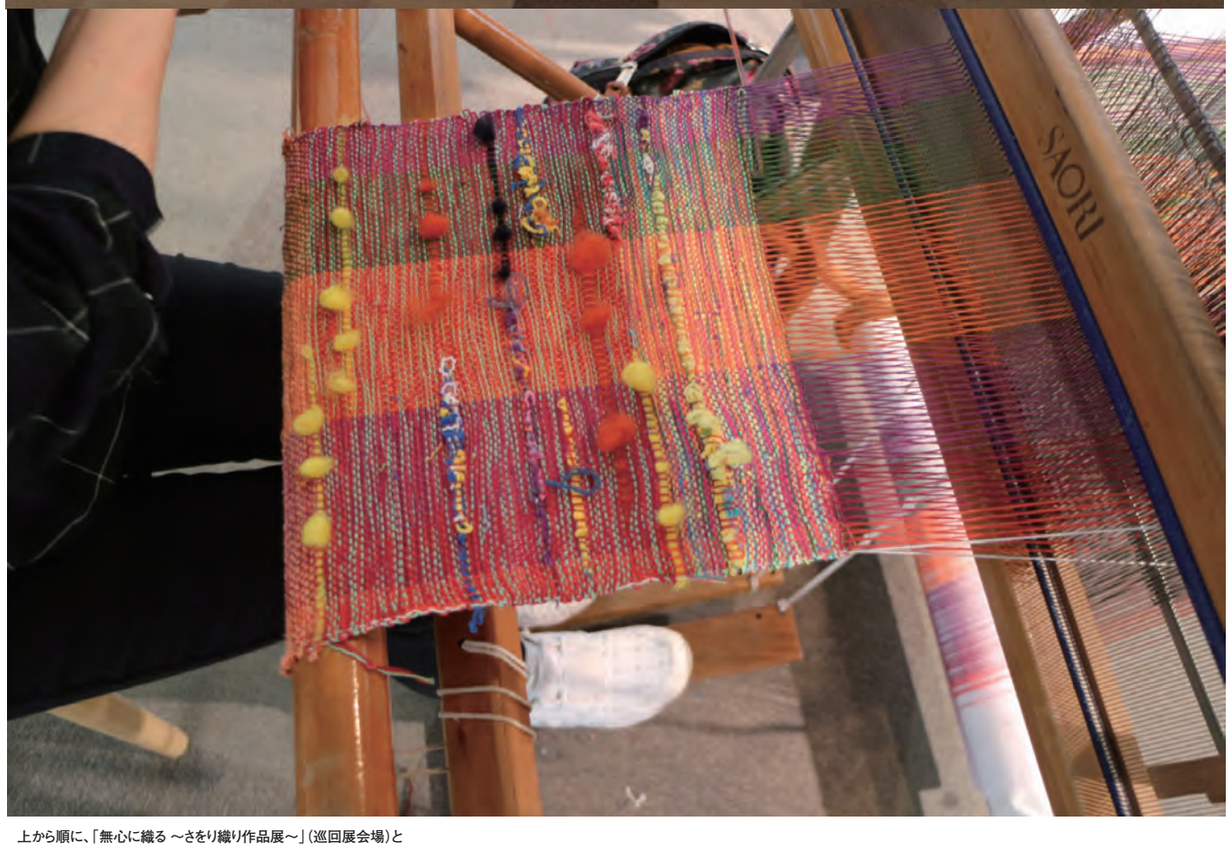
③ -1　企画展「無心に織る～さをり織り作品展～」

全国各地でさをり織りを楽しむメンバーの中から、魅力的な表現活動をしている作家17名と、鳥取県内で制作活動を行う新人作家2名の作品を併せて展示しました。会期中、誰でも参加することができる織りのワークショップを本展と巡回展の各会場で開催しました。

また、本展覧会の巡回展は、フクシ×アート WEEK2020（11/1～11/23）の連携事業として行いました。フクシ×アート WEEK とは「障がいと共に生きるアーティストたちの作品でまちを彩る」をテーマに、アート作品の展示等でJR 鳥取駅周辺を彩る企画です。

本展（会場：くらよしアートミュージアム無心）
2020年10月10日（土）～11月15日（日）

本展（会場：倉吉未来中心アトリウム1階みらいアートギャラリー）
2020年10月10日（土）～11月4日（水）



上から順に、「無心に織る ～さをり織り作品展～」（巡回展会場）と
企画展関連ワークショップ「さをり織りを体験しよう！」ワークショップの様子

巡回展（会場：とりぎん文化会館　展示室）
2020年11月18日（水）～11月26日（木）※フクシ×アート WEEK2020連携事業
協力：NPO 法人さをりひろば
来場者数：本展702名（32日間）/ 巡回展437名（8日間）　合計1139名

成果・課題：

○展示会場に合わせて、作品数を増やしたり展示方法を変える等の工夫を行ったことで、作品の魅力を活かす展示ができました。

○会場ではグッズ販売を行い、県内でさをり織りに取り組む事業所は、今後の商品開発の参考になったようでした。

③ -2 企画展関連ワークショップ「さをり織りを体験しよう！」

ミサンガを作ろう！

2020年10月17日（土）、11月14日（土）10:00～16:00

会場：くらよしアートミュージアム無心
講師：阪井 悠華（あいサポート・アートセンタースタッフ）、
　　潮 貴世江（手織り教室うさを 主宰）
参加人数：10月17日（土）19名 / 11月14日（土）18名

ティーマットを作ろう！（フクシ×アート WEEK2020連携事業）

2020年11月22日（日）　10:00～15:00

会場：とりぎん文化会館展示室
講師：金野 哲哉（NPO 法人さをりひろば）、
　　阪井 悠華（あいサポート・アートセンタースタッフ）、
　　潮 貴世江（手織り教室うさを 主宰）
参加人数：59名

成果・課題：

○展覧会の関連企画としてワークショップを開催したことで、より多くの方に作品を鑑賞していただくことができました。また、作品を見て興味を持ち、ワークショップに参加された方もありました。

○年齢や性別、障がいの有無に関わらず、幅広い方々に体験していただくことができました。中には複数回参加された方もありました。

○参加者の表情やコメント、アンケートの感想等をみると、参加者には概ね満足していただけたように思います。

○感染対策（消毒や余裕のある時間配分など）を取りながら行いましたが、巡回展会場では予想以上の来館があり、一時的に会場内の人数が多くなってしまったことが反省点です。

④企画展「山脇 貴文個展　anima – あにま -」

地元倉吉市在住の山脇貴文さんを紹介する展覧会。山脇さんは、令和元年度の「あいサポート・アートとっとり展」で美術部門最優秀賞を受賞されました。本展覧会では、小学生の頃に描いたデジタル作品をはじめ、細かい表現を求めて手描きで描くようになってからの作品を一堂に展示しました。

会場：くらよしアートミュージアム無心
2020年12月5日（土）～ 2021年1月17日（日）
来場者数：合計509名（33日間）

山脇貴文個展

ありがとうファーム巡回展@米子市美

成果・課題：

○地元倉吉の作家の展覧会ということで、今回新たな取り組みとして、倉吉市の協力のもと、市内全域の公民館の掲示板にポスターの掲示を依頼しました。その効果もあってか、県内中部からの来館者が多かった印象です。今後も県内の方に来館いただけるような工夫を続けていきたいと思います。

⑤企画展「橋本賢二とありがとうファーム新人作家展　もえているのはぼくらのこどう」

岡山県にある就労継続支援 A 型事業所「株式会社ありがとうファーム」に所属する3名の作家を紹介する展覧会。くらよしアートミュージアム無心では橋本賢二さんの作品を展示、倉吉未来中心では新人作家の伊藤士隼さんとかなっぺさんの作品を展示しました。

2021年1月23日（土）～3月7日（日）
巡回展：2021年3月12日（金）～3月16日（火）
本展会場：くらよしアートミュージアム無心 、倉吉未来中心アトリウム1階みらいアートギャラリー、
巡回展会場：米子市美術館第1展示室
共催：就労継続支援 A 型事業所　株式会社ありがとうファーム
来場者数：本展411名（38日間）/ 巡回展423名（5日間）　合計834名

成果・課題：

本展搬入時には作者の橋本さんも来られ、一緒に展示作業を行いました。作業後のミーティングでは、受付スタッフも交えて橋本さんから作品制作の流れや想いなどのお話を伺いました。今年度はトークイベントの開催ができませんでしたが、実際に作者と交流し、話を聞く機会を設けることは大切だと感じました。

貸館展示の開催

事業内容

県内でアート活動行う、障がいのある人や団体に対して、制作した作品を発表できる機会の提供を目的に、年に数回貸館期間を設けています。今年度は1団体が利用されました。

①貸館展示「I know 才能展　リベンジ！」

昨年度、新型コロナウイルスの影響で見送りになった展示を今年度再度企画。障がいのある方2名の作品を中心に、他2名の作家とのコラボ展を開催されました。あいサポート・アートセンターの補助金事業を利用しての取り組みです。

会場：くらよしアートミュージアム無心
2020年8月8日（土）～ 2020年8月14日（金）
来場者数：116名（7日間）
主催：いちごプロ。

外部機関との連携事業

「日本博を契機とした障がい者の文化芸術フェスティバル in 中国・四国ブロック」

事業内容

全国7つのブロックで開催予定の文化芸術フェスティバルの中国・四国ブロック大会を開催しました。ステージイベントは、オンライン開催となりましたが、各県から素晴らしい演技を届けてくださいました。また、アールブリュット展では、選りすぐりの個性溢れる作品が集まり、とても見ごたえのある展覧会を開催することができました。コロナ禍での開催となり、試行錯誤をしながらの開催でしたが、多くの方々の協力を得て無事に終えることができました。

会期：2020年9月5日（土）～ 9月6日（日）ステージイベント（映像配信）
※アールブリュット展は、9月5日（土）～10日（木）まで開催
会場：倉吉未来中心

日本博でのアールブリュット展

◆その他年間を通した取り組み

相談支援：
□年間相談件数 /65件
□主な相談者属性 / 障がい福祉関係者27件、当事者や家族12件など
□主な相談内容に対する対応 /
・ 創造に関する相談…講師の紹介、支援方法について助言
・ 発表に関する相談…発表方法の提案、発表機会の情報提供、展示方法について助言
・ 補助金利用に関する相談…利用方法の助言や提案

情報発信：
□ SNS（facebook）の更新回数 /270回（ページシェア含む）
※その他、twitter や instagram も更新
□フォロワー数の増減（約1年前と比較）/
・facebook　383人→429人（+46）
・twitter　305人→344人（+39）
・instagram　347人→495人（+148）
□各種 SNS の分析から分かること /
・instagram の、投稿日には150人近くの閲覧がコンスタントにありましたが、facebook と twitter は、投稿日に限らず多い日もあるなどばらつきが見られました。
・ 各種媒体の中でも、instagram のフォロワー数が一番伸びていました。
➡以上のことから、今後特に instagram の投稿を強化し、更新回数を増やすことや、掲載する写真を工夫すること等が必要だと考えられます。

あいサポート・アートセンター
障がい者アート活動支援事業補助金事業：
□今年度補助金利用団体 / 文化芸術活動促進事業37団体、個展等開催事業34団体（その他事業中止6団体）
□活動分野 / 美術、音楽、舞台発表など
□今年度の状況 / 新型コロナウイルスの影響で事業辞退や中止などがあり、昨年度よりも少し利用団体が減りましたが、補助金を活用して日々の練習やその発表、個展開催などが継続的に行えており、県内の障がい者芸術を盛り上げています。今年度は、オンライン配信で発表を行うなど、各団体が発表方法などを工夫して取り組んでいました。

関係者のネットワーク・外部機関との連携：
□じゆう劇場と養護学校とのワークショップの取り組み
障がいのある人とない人が一緒に芝居を作り、県内外で発表する「じゆう劇場」。このじゆう劇場と養護学校が連携をして、中学部で劇やダンスなど表現の学習を行っていく取り組みです。春から準備を行い、秋の校内祭りでそれを発表することを目標としています。当初今年度の取り組みとなる予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で来年度開催予定としています。

島根県

島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ

2020年度は、島根県の支援センター設置初年度となりました。名称を“島根県障がい者文化芸術活動支援センター アートベースしまねいろ”とし、看板設置、ホームページ構築、リーフレット作成など、県内の関係機関や当事者へ周知できる準備や状況づくりを行いました。特に今年度は、障害者週間に開催されていた島根県障がい者アート作品展の運営と実施を前団体から引継ぎ、無事に開催することを主事業として実施しました。2021年度以降も円滑な事業運営が展開できるように、研修会の参加や関係者とのネットワークづくりにも注力し、専門家アドバイザーの配置や文化芸術活動推進連絡協議会の開催など、各分野関係者や専門家とのつながりを構築しました。

Art
美術分野

2020年度
島根県障がい者アート作品展

2020年12月4日(金)～6日(日)

会場：島根県立美術館 ギャラリー
来場者数：のべ982名
連携機関等：島根県、社会福祉法人島根県社会福祉協議会、
島根県知的障害者福祉協会

事業内容

県内の障がいのある人が創作した作品を審査した上で展示を行いました。絵画・立体作品・織・陶芸・書など414点の応募がありました。審査会は、アート作品展の開催前日に支援関係者らの学びの場としてワークショップ形式の公開審査とし、アート専門家らと作品講評や意見交換ができました。開催初日は表彰式を行い、金・銀・銅賞の受賞者は島根県知事より表彰され、今後の創作活動の励みとなりました。その後、障がいのある当事者が舞台芸能に取り組んでいる“いわみ福祉会芸能クラブ”による石見神楽“大蛇”の披露を行い、表彰式に参加した来場者に鑑賞していただきました。コロナ禍ではありましたが、応募作品数・来場者数とも昨年度並みとなり、運営方法を前団体より無事に引き継ぐことができました。

審査員

島根県立大学人間文化学部 准教授　福井 一尊 氏
クシノテラス キュレーター　櫛野 展正 氏
島根県立石見美術館 専門学芸員　川西 由里 氏
島根県障がい者文化芸術活動支援センター センター長　髙岩 綾子 氏
島根県健康福祉部障がい福祉課 課長　村松 敦子 氏

上から順に、12月2日の公開審査、12月4日の表彰式、
アート展を楽しむ様子、作品展示の様子

芸能クラブによる石見神楽“大蛇”

Stage
舞台芸術分野

2020年度
島根県障がい者アート作品展 表彰式後のアトラクション上演

2020年12月4日(金)13:30-13:50

会場：島根県立美術館　ホール
出演団体：いわみ福祉会芸能クラブ
鑑賞人数：約100名

事業内容

舞台芸術分野の発表の機会創出および鑑賞の機会創出。県内で舞台芸能に取り組む団体として、いわみ福祉会芸能クラブの石見神楽“大蛇”を上演していただきました。

Others
本年度実施事業

取り組み①
島根県障がい者文化芸術活動支援センター オープニングセレモニー

2020年7月28日(火)

会場：総合福祉施設ミレ青山

設置者である島根県、事業受託者であるいわみ福祉会からのあいさつと、看板掲揚を行いました。

取り組み②
専門家アドバイザー定期相談会

第1回：2020年8月5日(水)
第2回：2021年3月10日(水)
会場：総合福祉施設ミレ青山

○スタッフ紹介、専門家アドバイザーの委嘱、2020年度事業計画について、意見交換(第1回)
○2020年度事業遂行状況、2021年度事業計画(案)について、意見交換(第2回)

取り組み③
2020年度
島根県障がい者文化芸術活動推進連絡協議会

2021年1月26日(火)

会場：島根県職員会館　健康教育室

島根県の各関係機関(文化、教育、障がい)から連絡協議会委員を選出していただき、支援センター含めて10名の委員による協議会を開催しました。(以下一部略)

取り組み④
Meetup! 石見～「まちと福祉と芸術文化」についてのオープンミーティングへのお誘い～

2021年2月20日(土)

会場：森のレストラン(江津市)
参加者数：21名
連携機関等：島根県、(公財)しまね文化振興財団、ヒビノデザイン

島根県西部(石見地域)で活躍する文化芸術活動に関心のある方々を対象に、様々な表現活動の分野から集まっていただき、新しいネットワークづくりに取り組みました。「まちと福祉と芸術文化」をテーマとして、参加者の方からの情報提供や石見地域の良さや発見、将来の希望などを改めて共有できるひと時となりました。今後はそれぞれのジャンルを越境しながらゆるやかに連携するマルチチームとして「atelier103(アトリエイワミ)」を立ち上げ、始動していきます。

その他年間を通した取り組み

障がいのある当事者およびそのご家族、福祉関係事業所や支援者の相談受付を行いました。対応については、相談内容に基づき、事前の専門家アドバイザーらとの相談内容の共有や対応方法の検討、広域支援センターや連携事務局からのアドバイスを参考にしました。
県内の当事者や支援関係者らの文化芸術活動に関する実態やニーズを適切に把握するため、アウトリーチによる訪問調査活動を開始しました。また、県内の文化施設関係者や作家アーティストらと少しずつ面識を持ち、支援センターの設置や活動意義について共有を図るよう努めました。

広島県

広島県アートサポートセンター

今年度は、新型コロナウイルス感染症の予防の観点から、福祉施設・事業所、教育機関では、外部関係者の施設入館の制限や、外出の自粛、例年行われていた施設や支援学校の作品展の中止など、これまで通りの創作活動・表現活動を行いにくい状況がありました。
そんな中、オンラインという新しいツールを取り入れ、障がいのある方が表現活動に主体的に参加できる表現活動の機会をつくること、支援者・サポーターの表現活動をサポートするスキルを向上させること、地域に障がいのある方の表現活動を応援してくださる人を増やすことを目指し、安全で安心して実施できる方法を日々考え、たくさんの方の協力を得ながら、今できることに取り組みました。

Art
美術分野

美術表現
オンラインワークショップ
「風景をつくろう」

2020年11月7日(土)13:30～14:30
8日(日)10:00～11:30

事業内容

どのような状況であっても、障がいのある方が作品制作を体験でき、表現技術の向上につながる場があること、サポートされる方の知識やスキル向上につながる機会があることを目指し、オンラインと会場のどちらかで参加できるよう環境を整え、同じ内容のワークショップを2回実施しました。

ワークショップ

色水を流し込むという、繰り返しの動作から、出てきた現象(作品)を楽しみ、その現象(作品)がなにに見えるか発想を展開させていく体験をしました。
また、紙や絵の具など「もったいない」と感じる行為、使用方法でも、その量や質の存在を無くしては得られなかった、楽しさや表現があることに気づき、創作活動の始まりや発展を柔軟に受け止め対応する姿勢、行為や生み出された創作物に無限の可能性があるという意識を持つ大切さを学びました。

会場：広島市心身障害者福祉センター及びオンライン
参加人数：1日目：27名 /2日目：3名
講師：美術家 粕谷 周司 氏
対象：障がいのある方、サポートされている方

Stage
舞台芸術分野

オンライン
演劇ワークショップ

2021年3月20日(土)　14:00～16:30

事業内容

演劇を専門に取り組まれている団体にサポートしていただき、障がいのある方とその他の参加者の繋がりの場となること、共に演劇表現を楽しみ、新たな表現方法を知ることを目的にオンラインを活用した演劇のワークショップを実施しました。

ワークショップ

5つの会場をオンラインで繋ぎ、演劇ワークショップを体験するコースと、ワークショップから出来上がった演劇をYouTube で鑑賞できるコースの2つのコースを設定し実施しました。ファシリテーターやプロの俳優と一緒に、オンラインで物語を創りました。

会場：合人社ウェンディひと・まちプラザ及びオンライン
ファシリテーター：役者 坂田 光平 氏
参加人数：ワークショップ参加コース15名、YouTube で見学コース7名
連携機関等：(一社) 舞台芸術制作室無色透明

Others

本年度実施事業

取り組み①

障害のある人、サポートする人の表現および美術展覧会の鑑賞に関する実態調査

本調査では、これまで実態が明らかにされてこなかった特別支援学校卒業後の障害のある人の表現活動や美術館やギャラリーでの美術鑑賞に焦点を当て、障害のある人及び支援者が生活の中でどのくらい美術に関わりを持っているのか、また、どのような点に表現活動や美術鑑賞の魅力や難しさを感じているのか、その実態を明らかにしました。

回答期間 :2020年6月24日(水)から8月7日(金)
回答者数 : 広島県内在住の370名から回答
連携機関等 : 広島県、広島大学、広島県アートサポートセンター

取り組み②

アートサポーターのためのオンラインスキルアップ講座

支援者・サポーターが障がいのある方の表現活動を支援するために必要な知識やスキルの向上を目的とし、オンラインの講座を4回開催しました。また、サポーター同士のネットワークづくりのため、講座後に質問コーナーや意見交換の場を設けました。

講座1「障がいのある人の表現活動で大切にしたいこと」

2020年10月16日(金)13:00～15:00

障がいのある方の表現活動が社会に広がっていった経緯を学び、今後サポーターとして障がいのある方の表現をどのように捉えていけばいいのかなど、講師と参加者で意見交換を行いました。

講師 : 鳥取大学地域学部教授 川井田 祥子 氏

講座2「表現を感じる」

2020年10月28日(水)15:00～17:00

内容 : 前半は画材になる材料や技法(あそび)などを学びました。後半は、参加者にお気に入り作品を1点紹介頂きながら、日々の活動の取り組みや、創作活動をしていて感じていることを話し合い、交流の時間になりました。

講師 : 美術家 松尾 真由美 氏

講座3「展覧会のつくり方」

2020年11月17日(火)13:00～15:00

様々な作品を通して多様な表現方法の知識を高めたのち、鞆の津ミュージアムの展覧会の企画方法や伝え方から、展覧会を企画するポイントや工夫について学びました。

講師 : 鞆の津ミュージアム 学芸員 津口 在五 氏

講座4「作品の見せ方と展示方法」

2020年11月25日(水)13:00～15:00

基本的な展示方法を具体的に学びました。また、額やマットの種類やその選び方のポイント、選ぶ際に役に立つサイトなどを知る機会になりました。

講師 : アートギャラリーミヤウチ学芸員 今井 みはる 氏

取り組み③

ダンスワークショップ「つながるダンス」

障がいのある方が多様な表現方法を体験でき、表現技術の向上につながる場があること、サポートされる方の知識やスキル向上につながる機会があることを目指し、「つながる」をテーマに3回のワークショップを行いました。

講師 : ボディ・マインド・ヘルスセンター 荒川 香代子 氏

ワークショップ1「身体とつながる」

2020年11月13日(金)16:30～18:00

呼吸とリズム、大小の動きなどを通して、身体の変化を感じることを体験しました。

ワークショップ2「心とつながる」

2020年11月20日(金)16:30～18:00

声と身体、ジェスチャーダンスを体験しました。

ワークショップ3「わたしの中のワタシとつながる」

2020年11月27日(金)16:30～18:00

1回目と2回目の体験を生かして、新しい自分を発見しました。

取り組み④

美術表現映像ライブラリーの制作

サポートされる方の知識やスキル向上を目的に、日時や場所に関わらず学ぶことができる、美術表現の映像ライブラリーを制作し、映像はオンラインで視聴できるようにしました。またDVDを制作し貸出できるように準備しました。

library1「絵の具で色を楽しもう !! ～イロイロな技法を使って～」

絵の具についての基礎知識と色々な技法を紹介。

講師 : わくわくアート探険隊長 にいのべ ちよ 氏

library2「共同作品をつくろう」

共同作品の準備や取り組み方について紹介。

講師 : アトリエラッカプラネット 西本 真祐子 氏

library3「版画を楽しもう 紙版画編」

紙版画の材料や、版づくり、刷りの方法など版画技法の基本的な技術を紹介。

講師 : 版画家 山先 方江 氏

library4「粘土を使った造形」

スーパーカルモを使って、粘土の技法や使うと楽しい道具、材料を紹介。

講師 : ひゅーるぽんアートスペース講師 橘 篤史 氏

library5「身近なものでつくる立体作品」

令和元年度サポートアート展の入選作品やワークショップから、障がいのある方の表現について紹介。

講師 : 広島大学人間社会科学研究科教職開発専攻准教授 池田 吏志 氏

ライブラリーは、広島県アートサポートセンターのホームページよりご視聴いただけます。

取り組み⑤

写真・動画づくりセミナー＆ワークショップ

2021年3月14日(日)13:00～17:00

障がいのある方が作品を見るだけでなく、そこから感じたことを ご自身が主体となって表現することで、芸術により親しんでいただくことを目的とし、広島県立美術館が所蔵する作品を「お題」に、スマートフォンやタブレットを使ったコンテンツづくりを体験しました。

場所 : 広島県立美術館
対象者 : 障がいのある方ご本人、障がいのある方と日常的に接している方
レクチャー講師 : 広島大学大学院人間社会科学研究科教職開発専攻 准教授 池田吏志氏、広島県立美術館 学芸員 福田浩子氏、広島県アートサポートセンター 鰐川華衣氏
ワークショップ講師 : 広島県立美術館 学芸員 森万由子氏、映像クリエーター 金山 翔氏
連携機関等 : 広島県、広島大学、広島県立美術館、広島県アートサポートセンター

取り組み⑥

アートの権利に関するオンライン勉強会

2021年3月20日(日)10:30～11:30

サポートされる方の知識の向上を目的とし、アートの基本的な権利について学ぶ。あわせて、著作権侵害に当たる可能性がある作品を通して、サポーターとして発表の際に気をつけておく事を確認する。

対象者 : 障がいのある方、障がいのある方の生活をサポートしている方、関心のある人
※この勉強会は講師の体調不良により中止になりました。

その他年間を通した取り組み

文化芸術活動に関する様々な相談支援や、障がいのある方の文化芸術活動に関する情報収集及び情報発信を行いました。また、普及活動としては権利に関するQ&Aハンドブックを配布しました。そのほか、専門家・関係者とのネットワークづくりやニーズに合わせた指導者派遣を行いました。

徳島県

徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター

徳島県障がい者芸術・文化活動支援センターは、障がいのある方、そのご家族や支援者、芸術・文化活動に興味のある方々とつながり、徳島県における芸術・文化活動の輪が広がっていくことを目指しています。
2020年度は、新たな試みとしてオンラインを活用したワークショップを行いました。多くの皆さんが参加できるよう今後も、積極的にオンラインの活用を行なって行きたいと考えています。また、2021年1月に徳島県立障がい者交流プラザ内に新設されたギャラリーでは、年間を通して作品鑑賞の機会を設け、障がい者芸術に対する理解と関心が高まるよう取り組んでいます。

Art
美術分野

第6回「障がい者アーティストの卵発掘展」

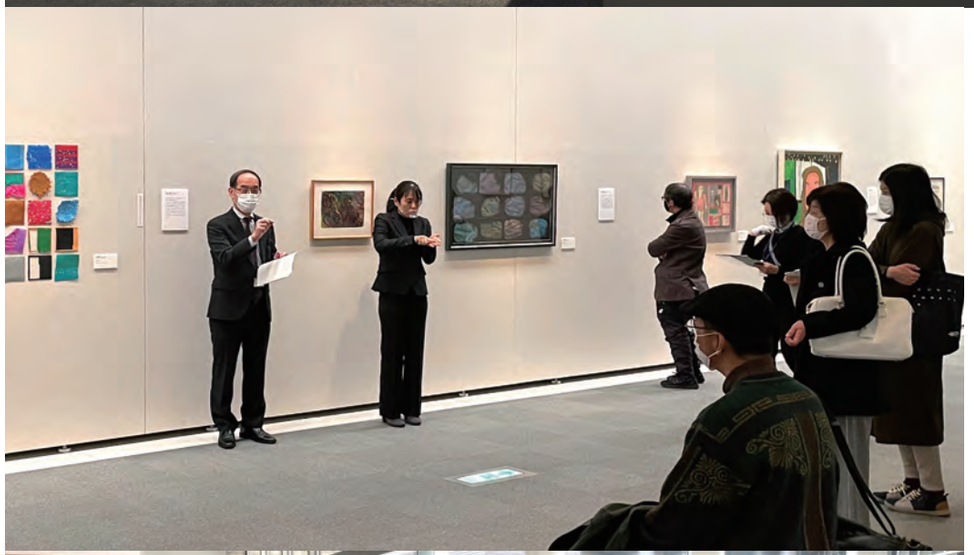
募集期間：2020年11月2日（月）～2021年1月9日（土）

展示期間：2021年2月17日（水）～23日（火）

会場：徳島県立近代美術館 1階 ギャラリー
審査委員：大学教授、デザイナー、写真家など県内有識者 7名

事業内容

徳島県内在住又は徳島県出身の障がいのある方のアート作品を募集、展示するとともに、優れたアーティストに対して活動支援金を支給し、その活動を支援する。
応募の結果、4才から72才までの82人の方々より出品をいただき、その中から金賞1名、銀賞1名、銅賞1名、審査委員特別賞4名が7名の審査委員により選ばれました。受賞された方には、徳島県知事より賞状を授与されると共に副賞が贈られました。また、会期中951人の入場者がありました。



上段／第6回「障がい者アーティストの卵」発掘展　（徳島県立近代美術館1階ギャラリー）　中段 / 展示解説（2021年2月11日（木・祝））徳島県立近代美術館　下段左 / いきいきと解き放つ命の輝き―アトリエコーナス、片山工房、たんぽぽの家の表現者たち 展 ゲスト・トーク（徳島県立近代美術館ロビー）　下段右 / いきいきと解き放つ命の輝き―アトリエコーナス、片山工房、たんぽぽの家の表現者たち 展 ゲスト・トーク 片山工房　（徳島県立近代美術館ロビー）

いきいきと解き放つ命の輝き
―アトリエコーナス、片山工房、たんぽぽの家の表現者たち

2021年2月11日（木・祝）～2月28日（日）

会場：徳島県立近代美術館
参加人数：入場者数：1226名 / ゲストトーク：64名 / 展示解説：10名
連携機関等：徳島県立近代美術館

事業内容

関西の障がい者福祉施設・アトリエとして著名な、アトリエコーナス（大阪市）、片山工房（神戸市）、たんぽぽの家アートセンターHANA（奈良市）で制作する表現者たちの作品を紹介しました。

事業プログラム詳細

①出品作品：アトリエコーナス 13作家 49点 資料1件 、片山工房 5作家 28点 資料1件、
　たんぽぽの家アートセンターHANA　8作家 31点 資料4件
②ゲスト・トーク（オンライン会議システムにより実施）
　2月14日（日）14時～15時
　　講師：アトリエコーナス代表理事　白岩 高子 、アートスタッフ 笠松 彩菜
　2月21日（日） 13時30分～14時30分
　　講師：たんぽぽの家アートセンターHANA アートディレクター 吉永朋希
　2月21日（日）14時40分～15時40分
　　講師：片山工房アートスタッフ 川本 尚美、榎 宣雅、久保 遥
③学芸員による展示解説
　2月11日（木・祝）　14時～14時45分
　　講師：森 芳功（徳島県立近代美術館　学芸員）

Others
本年度実施事業

取り組み①
障がい者アート活動支援のためのワークショップ

障がい者のアート活動を支援する方々また、福祉・教育・行政関係者に向けた専門家によるワークショップを開催しました。

①作品展示の基本ー考え方と体験ー

2020年9月17日(木)13:30～15:30

会場：徳島県立近代美術館1階　ギャラリー
講師：安達 一樹(徳島県立近代美術館学芸交流課長)
参加人数：12名
連携機関等：徳島県立近代美術館

②障がい者の芸術活動に関する権利
ー著作権を中心にー

2020年11月13日(金)14:00～16:00

会場：徳島グランヴィリオホテル
講師：森 晋介(森法律事務所 弁護士)
参加人数：10名

③療法的音楽活動を経験する
ー職場で音楽活動を実践するためにー

2020年11月28日(土)10:00～15:30

会場：ふれあい健康館
講師：井村 幸子(徳島文理大学音楽学部准教授)、千葉 さやか(徳島文理大学音楽学部講師)
参加人数：16名

④「ピアノ伴奏講座」(個人レッスン)

2020年11月17日(火)13:30～14:15

会場：徳島県立障がい者交流プラザ　プレイルーム
講師：徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター職員
参加人数：1名

取り組み②
陶芸出前講座

特別支援学校に講師を派遣し、幼児児童生徒の陶芸体験を行うと共に、支援者(教員)の陶芸における技術のスキルアップを図り、徳島県の伝統工芸である大谷焼に対する理解を深めました。

①2020年7月 7日(火)、9月8日(火)
会場：徳島県立阿南支援学校ひわさ分校(参加人数40名)

②2020年7月10日(金)、7月14日(火)
会場：徳島県立徳島視覚支援学校(参加人数28名)

③2020年7月16日(木)、2021年1月14日(木)
会場：徳島県立池田支援学校美馬分校(参加人数30名)
講師：田村 栄一郎(大谷焼元山窯十代目)

取り組み③
オンライン和太鼓ワークショップおよび陶芸講座

2020年9月19日(土) ～12月5日(土)

新型コロナウィルス感染症拡大により、障がい者(児)の芸術文化活動が制限されたなか、オンラインを活用し和太鼓ワークショップおよび陶芸講座を行いました。

会場：特別支援学校1校(和太鼓)、福祉事業所5施設(陶芸)
講師：瑞宝太鼓(和太鼓)、梅里窯、佳実窯、田村商事、森陶器、大西陶器(陶芸)
参加人数：和太鼓20名、陶芸68名
連携機関等：社福)南高愛燐会(和太鼓)、大谷焼陶業協会(陶芸)

取り組み④
障がい者芸術文化活動支援者のための視察研修

2020年10月14日 (水)

先駆的取り組みをしている県外の事業所の活動環境や支援方法等について視察研修を行うことにより、県内における障がい者芸術文化活動の一層の振興を図るため視察研修を行いました。

会場：社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房 (滋賀県甲賀市)
参加人数：18名

取り組み⑤
外国人アーティストによるワークショップ

2020年11月29日(日)

外国人アーティストを招聘し、ワークショップを開催するとともに、異文化に触れる機会を設けました。

会場：障害児入所施設 未来
講師：ルーファス・ウォード(デザイナー)
参加人数：29名
連携機関等：神山アーティストインレジデンス実行委員会

取り組み⑥
プラザギャラリー開設記念作品募集・展示

募集期間：2020年10月～2020年12月

徳島県立障がい者交流プラザに新設される「プラザギャラリー」このギャラリーを、より親しみ易いものにするため、徳島県内在住または徳島県出身の障害のある方に広く作品を募集し、応募作品を1つの大きな作品としてまとめ展示する。
201人から189点(共同作品あり)の応募があり、その中から64点が選ばれ徳島大学総合科学部絵画表現研究室の協力で、1つの作品(縦162cm 横162cm)にまとめられ交流プラザ玄関ホールに展示された。また、選にもれた作品も交流プラザ2階ギャラリーに3月末まで展示しました。

作品選考・構成：平木美鶴(徳島大学総合科学部教授)
協力：徳島大学総合科学部絵画表現研究室

取り組み⑦
第6回「障がい者アーティストの卵発掘展」受賞作品展

2021年3月6日(土)～2021年5月23日(日)

第6回「障がい者アーティストの卵発掘展」において受賞した7作品を展示しました。

会場：徳島県立障がい者交流プラザ1階プラザギャラリー

その他年間を通した取り組み

文化芸術活動に関する様々な相談支援や、障がいのある方の作品調査をはじめとする文化芸術活動に関する情報収集(アンケート・ヒアリング調査含む)と記録、多方面の分野や領域の専門家・関係者とのネットワーク(企画委員会)づくりを行っています。

取り組み⑧
からだパフォーマンス虹色の生～藍のふるさとに咲く思い～(中止)

障がいのある方もない方も共に踊るダンスのワークショップ(2020年5月～2021年3月を予定)とダンス公演(2020年8月と2021年3月を予定)を予定していましたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため中止となりました。

作・演出・指導：田村 典子(四国大学生活科学部児童学科教授)
音楽：住友 紀人(作曲家)

愛媛県

愛媛県障がい者アートサポートセンター

2020年度は、愛媛県障がい者アートサポートセンターの設立２年目を迎えました。2020年度は、新型コロナウイルス感染防止対策を講じ、芸術文化活動の発表の場として「障がい者芸術文化祭」を開催し、多くの県民の目に触れる場所（松山大街道商店街）で、「作品展示」や「ふれあい交流イベント」を一体的に開催するとともに、県美術館で「障がい者アート展」を開催しました。また、障害福祉サービス事業所等を対象としたアンケート調査や、個別相談からの「指導者を求める声」を受けて、「外部指導者派遣事業」を新たに実施するとともに、研修会を実施しました。2021年度以降も、専門家の協力のもと、障がいのある方、ご家族、支援者などのニーズの把握に努め、皆さんとつながり、つなげていきたいと思っています。

Art
芸術文化活動を支援する人材の育成等

芸術文化活動を支援する人材の育成等

2021年2月11日(木・祝)～2月28日(日)

事業内容

事業所等で芸術文化活動を支援する者等に対して、創作活動や表現活動の支援方法、作品展示の方法に関する研修を実施しました。

(1)研修会の開催

『写真撮影　基本のテクニック』

2020年9月2日(水)13:30～15:50

障がいのある方の芸術文化活動を支援している支援者が、アート作品の保存や製品への利用、また、チラシ、SNS 等に掲載できる写真を撮影するために押えておかなければならない基本的なポイントを習得し、質の高い活動を行うための必要な知識やスキルを身に付けることを目的に実施しました。

講師：片岡 仁 氏(写真家)
対象：事業所等で芸術文化活動を支援する者等
内容：講義、ワークショップ(アート作品や授産製品などの写真撮影)、講評
場所：愛媛県身体障がい者福祉センター 大会議室
参加人数：15名

『作品展示研修』

2020年11月27日(金)13:00～17:00
28日(土)10:00～17:00
29日(日)10:00～15:00

障がいのある方の芸術文化活動を支援している支援者が、アート作品の保存や製品への利用、また、チラシ、SNS 等に掲載できる写真を撮影するために押えておかなければならない基本的なポイントを習得し、質の高い活動を行うための必要な知識やスキルを身に付けることを目的に実施しました。

場所：愛媛県美術館 新館2階 特別展示室
作品展示監修：和泉 明子(デザイナー)
参加対象者：障がいのある方の芸術文化活動を支援している人、関心がある人
内容：什器組立・設置、作品展示作業。
参加人数：17名

(2)指導者の派遣

2020年8月上旬～2021年2月下旬

障がいのある方や事業所に芸術文化に造詣の深い外部指導者を派遣し、ダンスや音楽、絵画などの取組みについて専門的な指導を行うことにより、裾野の拡大や活動のブラッシュアップを図りました。

実施数：14団体(事業所11団体、放課後等デイサービス3団体)、個人4者
指導者：舞台分野：2名(中村 和憲、新名 真裕美)、
美術分野：8名(遠藤 裕人、岡田 智恵、玉井 枝梨子、富久 千愛里、早崎 雅巳、堀口 直子、森岡 萌子、県美術館学芸員等)
実施内訳：各3回実施
舞台分野2団体(事業所2団体)、美術分野12団体(事業所9団体、放課後等デイサービス3団体)、個人4者
※個人は、県身体障がい者福祉センターで合同で実施。
※放課後等デイサービス3団体は、1回のみ実施。

事業所等に対しては、「利用者への直接指導」または「支援者への指導」を希望に応じて行い、利用者に直接指導する場合においては、共同制作、共同の中の個別、個別での指導など、事前の打ち合わせ、さらには指導しながらニーズをくみ取るなどして、一人一人の指導者によりそれぞれの実態に応じて工夫して行われました。
また、個人の選定は、これまでの個別相談の実績から関心を持たれている方にお声かけを行い、実施につなげました。
実施後の支援者からの感想では、指導の方法だけでなく、利用者の普段とは違う一面の発見、気付き、新たな出会いを喜ぶ声やこの事業の継続を望まれる声が多かったです。それは、利用者のみならず指導者からも寄せられました。

障がい者芸術文化祭の開催

障がい者の芸術文化活動の発表の機会を確保することにより、芸術文化活動に取り組む障がい者や事業所の創作意欲を喚起し、その活動の活性化を図ることにより、障がい者の芸術文化の更なる振興を図ることを目的としています。

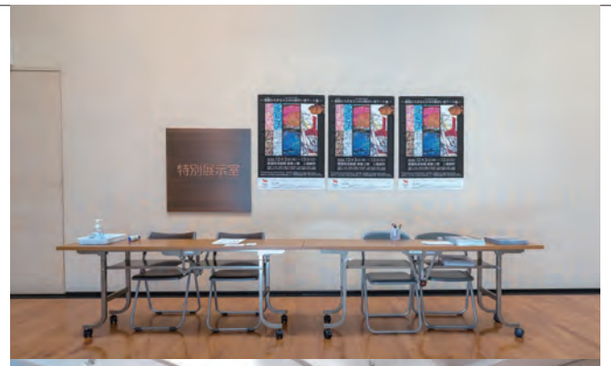
(1) 障がい者芸術文化祭～こころ集まれ2020～

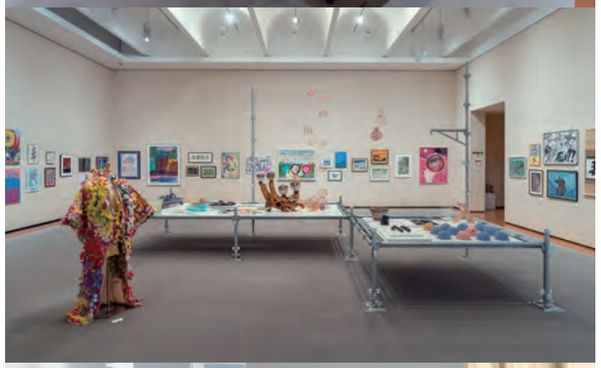
2020年10月10日(土)10:00～16:00

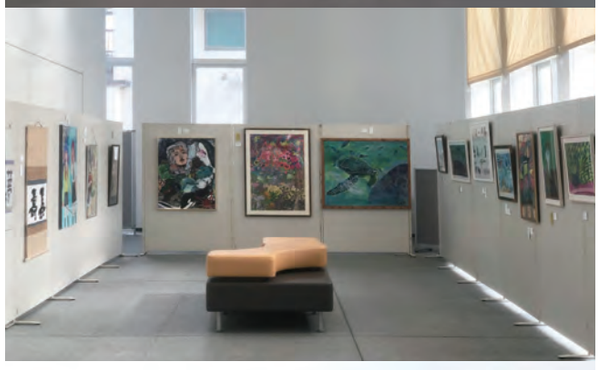
多くの県民の目に触れる場所(松山大街道商店街)で、障がい者や事業所等による歌唱、楽器演奏等の発表を行うとともに、障がい者アート作品の展示や障がい者アートを活用したＴシャツ等商品の販売、障がい者によるアートを活用したフォトスポットや事業所による活動発表等を行いました。

開催場所：松山大街道商店街アーケード内
開催内容：●ステージ発表(5者)ー障がい者等による歌唱、楽器演奏のステージ発表を事前収録した動画を、当日モニターにて放映するとともに、YouTubeで配信しました。
●アート作品展示(12者)ー絵画や立体作品、手芸、工芸品等の展示
●商品販売(25者)ー手作り雑貨、加工食品、農産物等の販売
●フォトスポット(3者)ー県内事業所とデザイナーによるアート体験型フォトスポットを設置しました。
●48時間デザインマラソン2020(4チーム×2者 =8者)ー障がい者とデザイナーがチームを組み、障がい者アートを活用した商品づくりのアイデアを練り上げるワークショップ及びプレゼンテーションを事前に実施し、当日モニターにて実施の様子を放映するとともに YouTube で配信しました。

新型コロナウイルス感染防止の観点から、2日間の開催予定が10月10日(土)のみの1日開催となり、イベント内容においても3密の可能性のあるイベントは中止または内容を一部変更するなど、実施内容等を縮小しての開催となりました。ステージ発表、48時間デザインマラソンはライブ発表に代わり事前収録した動画を会場で放映するとともに、同時に YouTube でも配信した。このことは、発表の場の確保とともに会場に足を運ぶことができない方々にも見ていただく、知っていただく機会となりました。







(2) 障がい者芸術文化祭 ～愛顔ひろがる えひめの障がい者アート展～

2020年12月3日(木)～12月13日(日)(
計10日間・13日は17時まで。8日は休館日のため除く)

県内在住の障がい者から広く作品の公募を行い、優れた作品を表彰するとともに、応募のあった全作品を展示しました。

開催場所：愛媛県美術館　新館2階　特別展示室
作品募集期間：2020年9月23日(水)～10月23日(金)
部門：絵画、書道、陶芸、その他立体作品の4部門
表彰：15名(特選1名、優秀賞3名、佳作10名、観客賞1名)
表彰式(新型コロナウイルス感染防止のため中止)：2020年12月3日(木)
(愛媛県美術館新館　特別展示室3で開催予定 / 初日に表彰式を行い、特選及び優秀賞、佳作受賞者に賞状と副賞を授与)

作品展示：397点(応募のあった全作品を展示)
来場者：2161名
観客賞：1点。来場者による投票で観客賞を決定(総投票数：5,332票(1人3票まで投票可))
巡回展示：入選作品15点を東予・中予・南予の各会場に展示
中予会場：2020年12月16日(水)～23日(水)伊予市役所
東予会場：2021年1月14日(木)～26日(火)新居浜市あかがねミュージアム
南予会場：2021年1月30日(土)～2月14日(日)八幡浜市立市民図書館

展示作品数が397点(令和元年度274点)、来場者が2,161名(令和元年度 1,906名)と予想を超えた参加となり、広がりを感じるアート展となった。しかし、新型コロナウイルス感染防止の観点から、中津川浩章氏に依頼していた審査参加及びギャラリートークを中止せざるをえなかったことが残念でした。

来場者アンケートには、「作品も、展示方法も見入るものがありました。」「生活、生きる＝アートになっていることや、その世界を見つけた周りの人達もすばらしいことだと思いました。」等の感想が多く寄せられました。

令和元年度アート展入選作品の中からえひめ洋紙株式会社により「チャレンジドえひめ2021カレンダー」が制作・販売され、その収益はアーティストに還元されました。そして、今年度の入選作品の中から2022カレンダーの制作準備がすでに始まっています。

その他年間を通した取り組み

文化芸術活動に関する様々な相談支援や作品公募、作品展、イベント等のお知らせなどを行っています。

また、当センターが設置されている愛媛県身体障がい者福祉センターの館内及び隣接する　ほほえみ工房　ばれっと道後　花楽里の店内に障がいのある方の作品を展示し(2020年度展示回数10回)、発表の場とするとともに来館者等に障がいのある方のアート作品を鑑賞する機会としています。

上から順に、12月2日の公開審査、12月4日の表彰式、
アート展を楽しむ様子、作品展示の様子

高知県

藁工ミュージアム　分室

支援センターとして3年目。「継続」「つながり」を大切にし、事業同士や事業全体が分野・枠を超え横断しながら展開していけるよう、数年構想で計画しています。本年度は、美術分野においては、表現活動が公募を目的としたものから拡がることを目指し、新しい表現方法に出合い楽しむ場づくりと、新たな表現を引き出していく手法や環境を考えていける人材の育成事業を重点的に行いました。また、今年度より本格的に舞台芸術分野の活動に取り組み始め、障がいのある方が主体的に創作活動に参加できる機会をつくるとともに、参加者個々の特性を活かした作品づくりを行っていける人材育成にも注力しました。

Art
美術分野

多様性を育む美術プロジェクト

「絵画ワークショップ & ファシリテーション講座」

須崎会場：2020年11月22日（日）

プログラム①絵画ワークショップ　13:00～15:00
プログラム②ファシリテーション講座　15:15～16:45
会場：多ノ郷体育センター
参加人数：①11名 ②10名
連携機関等：文化庁 / クリエイティブ・アート実行委員会 / 須崎市 / 暮らすさき

高知会場：2020年11月23日（月・祝）

プログラム①絵画ワークショップ
（午前の回 /10:00～11:40 午後の回 /13:00～14:00）
プログラム②ファシリテーション講座　15:00～16:30
会場 :U プロジェクト
参加人数：①19名 ②9名
連携機関等：一般社団法人 U プロジェクト / クリエイティブ・アート実行委員会

事業内容

「クリエイティブ・アート実行委員会」が継続して行っている「多様性を育む美術プロジェクト」の定期的・継続的ワークショップの実践の場と、障がいのある方たちが表現活動に参加できるための手法を学んでもらうファシリテーター育成の場の体験を、県内2か所で実施しました。

①絵画ワークショップ

絵の具を使い、何か物を見てそれを写し描くのではなく、絵筆やハケ、ローラー、スポンジなどさまざまな道具を使うことで生まれてくるおもしろいカタチから新しい表現を自由につくりだすことを参加者みんなで楽しみました。障がいの有無に関係なく参加者がまざりながらの制作は、それぞれが持つ感覚や創造性を相互に刺激し合うとともに、これまでに気づかなかった創造性を自身や支援者が発見する機会ともなりました。

講師：西村 陽平
対象：幼児から小学生、障がいのある方たち、絵画に興味のある方たちなど

②ファシリテーション講座

障がいのある方たちや子どもたちの創造性をどのように引き出していくかなどワークショップをファシリテートする方法を、講師のアシスタントとして立ち会いながら学んでいただきました。専門家が非専門家を教える、という構図ではない実践の場に立ち会うことが、障がいのある方たちや非専門家の方たちの創造性、身体性が、一般の方々、アーティストたちに新しいアートの可能性に気づかせることともなり、それぞれの既成概念を超える機会ともなりました。

講師：西村 陽平
対象：福祉施設、特別支援学校の職員など障がいのある方やそういった方々の表現活動に関わる方

障害者の文化芸術創造拠点形成プロジェクト DANCE DRAMA「Breakthough Jouney」

事業内容

「国際障害者交流センター ビッグ・アイ」が「日本博」事業で行ったダンスプロジェクト。日本6か所・アジア4か国を拠点に、ワークショップ・オーディションにて選ばれたプロダンサー、障がいのあるダンサーと、振付家、ダンスカンパニーDAZZLE が協働し、各地の風土を活かした作品をつくり上演しました。

ワークショップ・オーディション

2020年8月22日(土)13:00-15:00

会場：高知市文化プラザかるぽーと　小ホール
講師：DAZZLE/ 小倉 卓浩
参加人数：13名
選考結果：5名
連携機関等：一般社団法人 U プロジェクト / クリエイティブ・アート実行委員会

クリエイション

2020年10月～2021年1月

振付・指導：小倉 卓浩
会場：ダンスクリーム、高知市総合体育館、高知県立県民体育館

ダンス公演

①2021年1月30日(土)12:00～ / ②17:00～
③2021年1月31日(日)12:00～

会場：国際障害者交流センター ビッグ・アイ
キャスト：DAZZLE、アンサンブル、BOTAN、森田かずよ他 約90名

Stage
舞台芸術分野

Ryohei　Tomita

上段 / ワークショップ・オーディションの様子
中段 / 真剣なクリエイションの一幕
下段左 / ダンス公演の様子
下段右 / 公演出演メンバー
左から吉田亜希、名和美幸、山本香菜子、長江真由、片岡美由紀

Others
本年度実施事業

取り組み①
展覧会
「ちいさな蔵の展覧会2020」

前期　2020年4月29日(水)～7月26日(日)
後期　2020年8月5日(水)～10月12日(月)

高知県在住の方を中心とした障がいのある作家たちの作品を紹介する「ちいさな蔵の展覧会」シリーズの第5回目として、20年以上前から制作活動を続けてきた開徳由理の絵画・さをり等の作品を、前期・後期と違った視点から紹介しました。

連携機関等：アートセンター画楽 / 高知さをりひろば / すずめ三里ホーム / 宇野薫

取り組み②
障がいのある方とつくる演劇についてのトーク＆ワークショップ
「内藤さんに聞いてみよう！ 内藤さんと演(や)ってみよう！」

2020年9月27日(日) 13:30～15:30

滋賀県にある知的障害者施設の「あざみ・もみじ寮」で、秋浜悟史氏指導の下1979年から行われ始めた演劇活動に30年以上関わり続けている内藤裕敬氏を講師に招き、お芝居の制作過程や演劇活動による参加者・関係者・ご自身の変化などを伺うとともに、内藤氏が行う演劇活動を参加者全員でほんの少し体験しました。

会場：高知県立県民文化ホール 3階 第5多目的室
講師：内藤 裕敬
連携機関等：高知県立県民文化ホール / ヨシダワークス

取り組み③
インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響 -Kyo によるダンスワークショップとダンス公演

ダンスワークショップ「響 -Kyo と踊ろう！」

一般対象：2020年10月14日(水)19:00～21:00
特別支援学級＋前日参加者対象：10月15日(木)13:30～15:00

会場：高知県立県民文化ホール 3階 第5多目的室
講師：河下 亜紀(インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響 -Kyo 教育部顧問)
アシスタント：響 -Kyo ダンサー
連携機関等：文化庁 / クリエイティブ・アート実行委員会 / 高知県立県民文化ホール / 昭和小学校

これまでさまざまな障がいのある方々とのインクルッシブ・ダンスを行ってきた講師・ダンサーと一緒に、ダンスの型やステップにとらわれず、一人一人の自発性と個々の創造性を活かしながら自由に身体と遊んでみるワークショップを行いました。それぞれの身体性を活かした新しいダンスとの出会いや、身体の新しい表現の可能性に気づく機会になるとともに、一般参加者の各々の活動や学校での活動に新たな視座が取り入れられる機会になりました。

インテグレイテッド・ダンス・カンパニー響 -Kyo 高知公演

2020年10月16日(金)19:00開演

身体に障がいのある方々を含めたダンス・カンパニーによる、さまざまに異なる独自の身体性を活かしたダンス作品を2作品上演していただきました。

会場：高知県立県民文化ホール　オレンジホール
上演作品：Open State/ パワポル
連携機関等：文化庁 / クリエイティブ・アート実行委員会 / 高知県立県民文化ホール

取り組み④
いろいろいろを楽しむ演劇プロジェクト
「祝祭 音楽劇 小さな星の王子様」の脚本制作

制作期間：2020年4月 -2021年3月

公募したメンバーと県内を拠点に活動する劇団と協働し、「星の王子さま」(原作／サン・テグジュペリ)のお芝居の脚本をつくりました。

構成：シアターTACOGURA

演出：藤岡 武洋
制作アドバイス：吉田 剛治
制作に携わった方の人数：21名
連携機関等：シアターTACOGURA・NPO 蛸蔵 / 高知県社会福祉協議会

取り組み⑤
展覧会「WARAKOH think and feel 東北 vol.4
『10年目の今考える』」

公募期間：2020年11月15日(日)～2021年2月7日(日)
展覧会会期：2021年3月1日(月)～2021年5月9日(日)

東日本大震災から10年経ち、変わりゆく暮らしの中で改めて東日本大震災に向き合い、考えることを投げかける展覧会。構成する企画の一つの柱として、「防災」に強い想いをもちながら制作を続ける本県在住作家・清岡明の絵画作品を紹介しました。本展では東日本大震災に対する想いや伝えたいことを表現した写真とエッセイによる作品も全国公募。障がいのある方の表現発表の場ともなりました。

連携機関等：作業所ら・ら・ら / 大キイキ

その他年間を通した取り組み

文化芸術活動に関する様々な相談支援や、障がいのある方の作品調査をはじめとする文化芸術活動に関する情報収集(アンケート・ヒアリング調査含む)と記録、多方面の分野や領域の専門家・関係者とのネットワークづくりを行いました。

上／「ちいさな蔵の展覧会 2020」展示の様子（写真：織田 庸三）
下／「10 年目の今考える」会場の様子（一部）

1. 障害のある人の文化芸術活動推進事業（委託事業）

事業内容

東京2020パラリンピックを契機に、今後、障害のある人の個性と能力の発揮及び社会参加の促進が図られるよう、平成30年6月に施行された「障害者による文化芸術活動の推進に関する法律」の趣旨を踏まえ、障害のある人の創作活動や交流促進、人材育成・権利擁護を推進するとともに、作品発表等の機会をさらに拡大し、障害のある人の作品の魅力を力強く発信する。

①全県公募展「第4回 きらぼし★アート展」の開催

2020年10月10日（土）～10月31日（土）
9:00～17:00（月曜日休館）

障害のある人一人ひとりが内包する個性と表現力を放出し、星のように輝いてほしいとの願いを込めた県内の公募展です。

新型コロナウイルス感染症の影響により、一時は展覧会の開催が危ぶまれましたが、無事に開催することができ、第4回きらぼし★アート展では過去3回を上回る数の作品の応募がありました。また、来場者数も2,167名と伸び、芸術にゆかりの深い倉敷で障害のある人の力強く、新鮮な表現によるアート作品を多くの人に届けることができました。

公募期間：2020年7月15日（水）～9月4日（金）
応募数：絵画217点・造形57点・写真24点（合計298点）
展示数：絵画　50点・造形16点・写真15点（合計　81点）
会場：加計美術館（倉敷市中央2-6-1）
来場者数：2,167名

②おかやま障害者アート普及促進事業

（1）創作活動支援・交流促進事業（ワークショップ開催）

アートや創作活動に取り組んでいる人を講師に、アート・ものづくりのワークショップ、障害者アート作家の創作活動を間近に体感できるライブペイントを開催し、障害のある人の創作活動の支援・交流を図る。

アーティストトーク

2020年10月10日（土）10:00～10:30

数名の作家による作品紹介。

会場：加計美術館
参加者：50名（申し込み不要）

美観地区を撮る

2020年10月25日（日）10:00～12:00

フォトジェニックな美観地区を散歩しながら、楽しく写真を撮る。

講師：長瀬 正巳 氏（山陽新聞社 元写真部長）
定員：20名（要事前申込）
参加者：14名

マスキングテープで缶バッジづくり

2020年10月25日（日）13:00～15:00

いろいろなマスキングテープを使って、オリジナルの缶バッジを作る。

定員：30分ごとの入れ替え制（計4回実施）。各回5名（要事前申込）
参加者：35名

（2）人材育成・権利擁護推進事業（セミナー等の開催）

障害福祉サービス事業所職員や文化芸術関係者等を対象に、講演やパネルディスカッションを通じて障害のある人の文化芸術活動を支援する人材の育成や、文化芸術活動において必要な権利擁護の知識等の習得を図る。

講演会

2020年10月10日（土）13:00～14:50

①『「ウィズコロナ時代」のアートの役割
—文化の連帯と共助モデルを考える—』

講師：播磨 靖夫 氏（一般財団法人たんぽぽの家理事長）

②『なさけの庭と社会福祉』

講師：児嶋 塊太郎 氏（洋画家・加計美術館館長）
会場：倉敷市立美術館　3階講堂
定員：80名（要事前申込）
参加者：70名

シンポジウム『福祉と文化とアート』

2020年10月10日（土）15:00～16:15

シンポジスト：播磨 靖夫 氏・児嶋 塊太郎 氏、大原 謙一郎 氏（大原美術館名誉館長）、伊藤 香織 氏（倉敷市長）
コーディネーター：坂本 文雄 氏（岡山障害者文化芸術協会 代表理事）
参加者：70名（講演・シンポジウム併せて）

2. 県庁アートギャラリー

事業内容

障害のある人の個性輝く作品を、より多くの人が観覧できるよう、平成25年3月から岡山県庁1階県民室において「障害のある人の県庁アートギャラリー」を常設し、福祉施設の利用者が制作した、絵画や版画・コラージュ・写真・書道・切り絵等の平面作品を展示している。

障害のある人の制作意欲を支えるとともに、多様な表現による個性豊かな楽しい作品の展示により、県民室を訪れる皆様が障害者芸術に触れ、障害への理解を深めるきっかけとなっています。

2020年

4月	社会福祉法人旭川荘 くわのみどりの家	5作品
5月	社会福祉法人旭川荘 デイセンターあかしや	5作品
6月	社会福祉法人旭川荘 吉備ワークホーム	5作品
7月	社会福祉法人旭川荘 かえで寮	5作品
8月	社会福祉法人金曜会 わくわく祇園 's	5作品
9月	一般社団法人サニーライフ	5作品
10月	岡山県健康の森学園	5作品
11月	社会福祉法人岡山県視覚障害者協会 岡星寮	1作品
	社会福祉法人泉学園 デイセンターなずな	4作品
12月	社会福祉法人同仁会 障害者支援施設のぞみ園	5作品

2021年

1月	社会福祉法人旭川荘 かわかみ療護園	5作品
2月	社会福祉法人恒和永千会 ぽれぽれ表町分場	5作品
3月	株式会社ありがとうファーム	5作品

3. 障害者週間啓発事業での取り組み

事業内容

今年度は、新しい取り組みとして、障害者週間でのアート作品の展示を企画しました。「障害者週間」アールブリュット展では、福祉施設13施設の作品が一堂に会し、これまでにない内容豊かな展覧会となりました。

このアールブリュット展からの選抜5作品を展示した、イオンモール岡山での展示は、土・日曜日のみの展示でしたが、多くの買い物客が足を止めて興味深く鑑賞されていました。

「障害者週間」アールブリュット展

2020年11月30日（月）～12月4日（金）

会　場：県庁1階　県民室
内　容：障害のある人が制作した絵画作品の展示
作品数：16点

「障害者週間」ポスター・パネル展での絵画作品の展示

2020年12月3日（木）～12月9日（水）

絵画作品の展示：12月5日（土）・6日（日）
会場：イオンモール岡山3階 イベントスペース
内容：障害に関するポスター・パネルの展示に併せて、障害のある人が制作した絵画作品を併せて展示した。
作品数：5点

山口県

県障害者芸術文化祭の開催

2020年11月25日(水)～12月6日(日)

障害者が制作した作品の展示等

(主催：山口県障害者芸術文化祭実行委員会)

作品展示

会場：山口県政資料館
作品出店数：239点
来場者数：459人

表彰式

2020年12月6日(日)

会場：県旧県会議事堂
受賞者：知事賞ほか31名

県文化芸術活動相談支援の実施

障害者本人やその家族、障害者施設等からの相談を受け付け、関係機関の紹介やアドバイスを実施(委託：山口県障害者社会参加推進センター)。

障害者アートセミナーの実施

2021年2月14日(日)

障害者アートに関するセミナーを開催

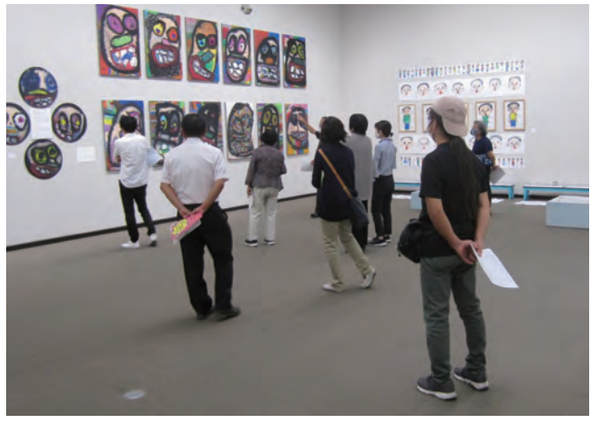
実施主体：山口県
会場：オンライン開催(zoom)
内容：障害のある人のアート活動のサポートについて
講師：岡部 太郎 氏(一般財団法人たんぽぽの家)、大井 卓也 氏(一般財団法人たんぽぽの家)
参加者：14名

障害者文化芸術作品等調査・発掘事業

2021年2月14日(日)

造形活動を行う県内障害者施設等を訪問・調査し、その活動実態を把握するとともに、優れた作家・作品等を発掘し、全国に負けないアール・ブリュット作品や、施設等の取組などを広く県民に紹介。(委託：特定非営利活動法人はれたりくもったり)

香川県



第1回会議

障害者文化芸術活動を取り巻く現状と課題

2020年6月26日(金)

・全国の取組状況
・香川県の取組状況の一次調査結果
・「香川県障害者芸術祭2019」参加団体への今後の文化芸術活動に関するインタビュー結果

第2回会議

文化芸術活動の取組状況調査報告

2020年8月20日(木)

本県の障害者文化芸術活動二次調査結果の報告

第3回会議

「ふしぎ na たね展」(坂出市美術館)現地視察及び意見交換会

2020年9月24日(木)

・今後の本県の障害者文化芸術活動支援体制の検討

第4回会議

次年度の取組みについて

2021年2月15日(月)

・2021年度に「香川県障害者芸術文化活動支援センター(仮称)」設置に向けたセンターの業務内容や役割の検討を行った。

2021年度の体制について

委員会での検討を踏まえ、障害者の文化芸術活動を推進していくため、「障害者芸術文化活動支援センター(仮称)」の設置に向けた準備を進めていく。

『くくり』を捨てる『ススメ』

土谷　享（美術家、パスレル芸術文化活動支援コーディネーター）

土谷　享
Takashi Tsuchiya

1977年埼玉県生まれ。多摩美術大学卒業。2001年より"もちつもたれつ"をテーマに美術家ユニットKOSUGE1-16の活動をはじめる。「どんどこ!巨大紙相撲」（2006年～）や木造の人力メリーゴーラウンド（2017年～）などの様々なアートプロジェクトや展覧会を国内外の美術館、アートセンターで行なっている。2020年よりパスレルのコーディネーターを務める。

同じ言葉を発しても、受け手によっては真逆の解釈をされてしまう事が多くなってきた様に感じる。ヒトは、言葉を持った事によって伝達される情報が減り、コミュニケーションが単調になったということを、英国の発達心理学・言語学者の友人に聞いた事がある。もしかしたら、言語を獲得した事で失った多様なコミュニケーションを芸術は補っているのかもしれない。

厚生労働省から届いた令和2年度の「全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査報告書」に目を通す。その中で特に私の胸がキュウと苦しくなたのは、障害福祉施設へのアンケート集計結果における下記の部分である。

「あなたは、障害者による文化芸術活動は、障害者の個性や能力の発揮、社会参加などの成果につながると思いますか。」という問いに対して、肯定的な回答を選択された方の中で最も多い理由として「障害者による文化芸術活動に期待する成果は障害者の趣味や余暇活動の充実、生き甲斐の創出につながる」と回答している。

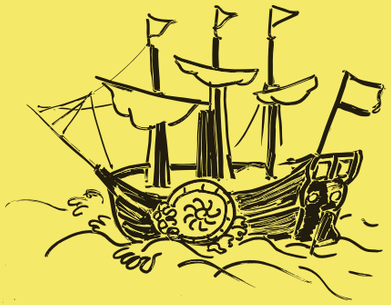
否定的な回答を選択された方の中で最も多い理由として「障害の有無にかかわらず、文化芸術活動は個人的な趣味や余暇活動だと思うから、文化芸術活動が障害者の個性や能力の発揮などの成果につながると思わない」と回答している。

肯定的意見と否定的意見の最も多い理由が同義である。つまり、趣味や余暇活動の拡充になるから成果につながる、個人的な趣味や余暇活動だから成果につながらない、この結果から見る趣味や余暇活動に対しての認識の乖離は大変重たいと感じる。趣味や余暇についての考え方や捉え方で、文化芸術活動を取り組むことについての立場を分断しているのである。例えば、ひとつの事実、今回の場合では文化芸術活動のことだが、その事実に対して事業所それぞれの、あるいは人それぞれの現実があるということは自明であり、先天的にそれぞれの主体がどのような初期値によって活動を開始し、どのような非線形軌道を日々描いているかという事が、文化芸術活動そのものへの認識にも大きく影響しているだろう。中国・四国エリアだけをとっても、事業所の数やそこに関わる人の数は膨大であるので、個別に軌道を修正する様な変数を外部から入力し続けるということは不可能だ。文化芸術活動を推進していこうとする我々の活動は、もはや位相を変えなければ結果として文化芸術活動を社会へ充満させることは不可能だろう。そこでパスレルとしてできることの一つは新たな位相を示していくということだと考える。本稿では2つの前提を示し、それについて実践した令和2年度の活動を紹介し、現在の共有するべき課題を新たに提示しようと思う。

そもそも文化芸術活動とは多様な文化や視点を受け止めてくれる、または多様な文化や視点に出会わせてくれるプラットフォームである。そして誰でもアクセスできる。私の思いつく限り、世の中のあらゆるジャンル

の中で文化芸術活動ほど多様で自由でバリアフリーなプラットフォームは無い。そして入り口はどこにでもある。これが1番目の前提だ。

次に、芸術を日常的な消費行動から考えてみる。コンビニに行って好みの菓子を買うとしよう。様々なパッケージが棚に並ぶ。その中から商品を手に取る時には誰もが選択をする。その時に何を手がかりに選ぶだろうか。パッケージのデザインや、味、お店の BGM による気分など様々な要因があると思う。これらの行動には文化、風土や流行、そして個人の好みや身体感覚が反映されている。この瞬間的な選択行動の根幹には、実は環境や経験が大きく影響している。商品や店は多くの場合、そうしたくなるようにデザインされいるのだ。そしてそのデザインが引用するベースとなるものは、誰にでも年輪の様に蓄積されている文化である。つまり、意識せずとも誰もが文化のデータベースを持っている。そして、その文化とは、様々な場面や環境や経験と紐付きながらアーカイブされていて、心の発動と共にある種のオペレーティングシステム（OS）を介在させれば、他人とも共有したり共感したりできるものなのだ。OS は情報をアプリケーションに橋渡しする役目がある。アプリケーションとしては自らの身体や声、さらに文筆やドローイング、作業の工夫など様々な行為がある。そしてこれらを通じた編集の延長上にあるものが芸術の一側面である。これが2番目の前提だ。



1番目と2番目の前提さえ抑えていれば、だれでも文化芸術プラットフォームに参加できる。いつでもどこでも。しかし、ここに様々な事情や駆け引きや好み、都合、教育観、経済観、損得など、視界を曇らすものが拡張子として付随されてくると、動作環境が悪くなり、文化芸術を心より迎え入れる事ができなくなる。足を引っ張る多くの要因はここにあり、我々も今、この沼にいる。その意味において、位相を変える必要があると私は考える。それは、逆説的に文化芸術を概念的に放棄してみるという意味でもある。

令和2年度にパスレルが主催として関わった「なんでそんなんエキスポ」はその好例である。滝沢達史をディレクターに起用し、中野厚志を共同ディレクターに招き、「ぬかつくるとこ」が日常的に取り組んでいる「なんでそんなんプロジェクト」をベースに企画を行った。特徴的なのは「障害」「文化」「芸術」「作品」「表現」「展示」「展覧会」これら全ての呼称と概念を捨てたプロジェクトなのだ。その内容については本誌別ページにて紹介しているのでそちらを参照いただき、本稿では文脈に必要な概念的部分のみを引用する。

── 誰でも参加できる。障害の有無は問わない。

全国に見られる障害者文化芸術の普及には様々な呼称を使いながら、何故か自ら垣根を作っている様にも見える流れにおいて、この本質

なんでそんなんの事例

的な姿勢は実はなかなか示せていなかっただろう。当プロジェクトにおいて「障害」は真に不問なのだ。

── アンデパンダン形式である。

そもそも「なんでそんなん」とは無審査、無賞の展覧会「アンデパンダン」のモジリから来ている名称である。イントネーションの柔らかさとは裏腹に、独立的であり束縛も受けないという強い姿勢を読み取る事ができる。

── 作品展示ではなく事例共有である。
展覧会ではなく博覧会である。

我々の多くは既にアートや芸術、またそれらと類する呼称による魔法にかかっている。しかし、なんでそんなんエキスポは、いちどその魔法から解かれなさい、という事を突きつける視点を持っている。共有されている事例の中には優れたアートとも言える物も数多くあったが、そこをあえてアートの外側に置くことで、実は「なんでそんなんの精度」を高める事ができている。アートに括った瞬間に、この精度は精彩を欠くことになるのだ。また、展覧会という言葉には最適化された物が並ぶ印象があるが、博覧会という言葉には雑多なものが含まれていて良しとする印象がある。意識的に位相をずらしていくディレクターの手腕は秀逸であった。

── 発見と行為の二者セットである。

ナラティブが先行する昨今の世界において、この方法は画期的である。日頃は問題として見放されていた行動が、愛のあるツッコミで世界が逆転することがある。なんでそんなんエキスポでの事例共有では沢山の逆転を目撃する事ができた。正に眼から鱗であった。

── OS である。

「なんでそんなん」は生活介護事業所「ぬかつくるとこ」のライフワークであり、「なんでそんなんプロジェクト」としてオンラインで事例の公募も行っている。なんでそんなん視点を日常にインストールする事で、何か問題があった時にも一歩引いた編集視点に立つ事ができ、さらにツッコミを入れる事ができたなら、それらは共有されて楽しみや共感へと移り変わる。また、自らの行いになんでそんなんのツッコミが入ったならば、失敗や間違いを恐れることもなくなり、生きやすさにつながっていく。そこで私は「なんでそんなん」とは「ぬかつくるとこ」という福祉事業所の日常から発明され、実装された OS（オペレーティングシステム）であると位置付ける。また常にこの OS を起動させて暮らしていれば、世の中の謎の行為に片っ端からツッコミを入れられる様になる。また、アート、福祉、介護、教育など様々なアプリケーションとも親和性が高く、その他にも様々な互換性を持っていると考えられる。

以上の様に、「なんでそんなん」は逆説的に文化芸術、そしてそこにくっ付いてくる視界を曇らす要素をいちど放棄すること、位相を変えることを能動的に推し進める画期的な OS なのだ。

さて、障害者福祉の事業の性格には、文化的な営みを支えるものと、就労目的の活動を支えるものとがある。障害者文化芸術活動を中間支援の立場で支える我々の射程範囲の中にはこの両者が含まれている。当然のことながら、文化芸術活動と相性が良いのは文化的な営みを支える性格の事業の方になる。一方で就労目的の活動を支える事業者にも同じ姿勢で文化芸術活動を一様に推奨しているという態度を見せることは、多くの場合はストレスになるのでは無いか。そう思うと文化芸術活動を推進する中間支援という事業性格の中でこの部分がボトルネックになる。しかしながら絵画や音楽やダンスが、就労を支える目的の事業所の中から表現されなくとも、日常の作業や業務の中にも些細な工夫や発見や創造があるはずである。それらはアートと何が違うのか?私は本質的には何も違いは無いと考える。自ら考え行動する、自ら考え実践する、このプロセスを端折った時に、その先にはもはやアートのアの字も生まれることはない。つまり、推進というものは、使い方によっては諸刃の剣である。パスレルの様な中間支援を担う事業においては、推進という姿勢を慎重に使わなければ、その受け止め方や現実はそれぞれ異なるので、本項最初に引用したアンケート結果の様に、同じ理由でも態度が乖離するということになる。これは、文化芸術活動の印象によってもたらされているものだと考える。逆に、印象をコマーシャルとして前面に提示することで推進をしてきたという前提もあるだろう。

印象という言葉のついでに印象派の活動を引用しようと思う。現在、多く取り組まれている個人の創作やギャラリーでの展示というスタイルや、持ち運びやすく小さな木枠にキャンバスを張り写生に出かけたり、チューブを絞れば絵具が出てくる画材類の多くは印象派やその文化の中で発明されたものだ。つまり彼らによって誰でも日常を編集できる様になった。まさにこの瞬間に芸術が誰の手にも行き渡ることが可能になったおよそ150年前、日本では黒船来航や桜田門外の変の時代だった頃の画期的な発明である。そして今は21世紀である。印象派の発明は画期的な素晴らしい OS だ。しかし様々なフェーズが当時と異なるにもかかわらず、当時のスタイルが再生産され続けることにもはや疑問を持たなければならない。そこに生の芸術はあるのか?古い OS では取れ漏らしているものが無数にある様に私は思う。時代や環境に見合った日常編集の視点と、それを橋渡しする OS こそ求められているだろう。中間支援組織としては、各地の福祉事業所に”日々の事業の延長上に”日常編集を実装したくなる活動を作っていく必要性を感じる。生の芸術はその先にある。

出典：厚生労働省　令和2年度障害者総合福祉推進事業「全国の障害者による文化芸術活動の実態把握に資する基礎調査報告書」（調査機関：株式会社ニッセイ基礎研究所　芸術文化プロジェクト室　発効日：令和3年3月）

なんでそんなんエキスポより
『オボットくん』『鳥谷 敬』『展示』『菊池郵便局』
行為者：ハルタニ（3歳・♂）　発見者：父

「なんでそんなんエキスポ」って いったいなんやったん座談会

司会：岡村忠弘(パスレルセンター長)
進行・モデレーター：土谷享(美術家、パスレル芸術文化活動支援コーディネーター)

ゲスト
滝沢達史(なんでそんなんエキスポディレクター / ホハル)
中野厚志(なんでそんなんエキスポ共同ディレクター / 株式会社ぬか)
丹正和臣(なんでそんなんエキスポデザイナー / 株式会社ぬか)

オブザーバー
津野雅人(パスレルスタッフ)
北添紫光(パスレル芸術分化活動支援コーディネーター)

なんでそんなん、はじまったん？

土谷　まずは、「なんでそんなんエキスポ」を開催した経緯についてのお話を。

そもそも当初は広島の支援センターとの取り組みを計画していたのですが、新型コロナの影響で頓挫してしまい、急遽新しい企画を考えはじめたのが事の発端でした。

中四国のなかで支援センター不在の県は3つあり、そのひとつが岡山県で、県の職員さんに積極的な姿勢があり、連携し刺激をすれば何かもう一歩前進するのではないかという狙いがありました。

また、コロナ禍において展覧会や公演関係は過酷な状況でしたが、そのなかで何か答えを出してくれそうな人はいないかなと考えたときに、岡山の滝沢達史さんが思い浮かんだことも今回のプロジェクトに至った要因のひとつだと感じています。

滝沢さんはぼくから突然のメッセージを受けて、どういう風に受け止めて、どういう狙いで企画を進めていってくれたのですか？

滝沢　最初に土谷さんからお話をいただいたときは、びっくりしました。何度か現場で土谷さんと一緒になった程度で特に親しい間柄ではなかったですが、SNS で活動を拝見しながら非常に参考にさせてもらっていたしリスペクトもしていたので、お話をいただけたことがすごく嬉しかったです。

ただ、ぼく自身のスケジュールが厳しかったことに加えて、展覧会までの準備期間がタイトだったため難しいなと感じていました。しかも、土谷さんのオファーにはちゃんと応えなければいけないなという思いもありましたし。

だから……、正直言うと「努力したけど無理だったね」ってなれば良いなと思って(笑)パッと浮かんだアイデアを「ぬか」さんに持っていって「無理です」って断ってもらおうと思ったんです。あるいは会場を探してみたけど見つからず、八方塞がりになったら良いなと思っていたんですが、それらを一日でクリアしちゃったんですね。それで、これはもう「やれ!」っていうことなんだと腹が決まりました。

それに、ぬかさんに関しても、土谷さんに関しても、おそらく向いている方向にブレはなく、チームとしてはまったく心配なかったので、いつしか自分のなかでもワクワクしていました。

ただ、「じゃあ、パスレルってなんだろう？ 岡村さんはどんな人だろう？」っていうのが見えなくて、まだ半信半疑なところもありました。

だから「やっぱり会わないと」ということになって、1月にそちらへうかがったんですが、大体こういう話って出資者側と意志が合わないことも多いのですが、行ってみたら本当に良い人しかいないんです。それは奇跡だなと思いました。帰りの車で、ぬかの二人と「これはもう誠心誠意やろう！魂が入ったね！」っていう話をしましたね。

「なんでそんなんプロジェクト」って、なんなん？

中野　ぼくも元々現場人間なので分かるのですが、岡村さんと話をさせてもらってその疑問質問がまっすぐ過ぎて、現場をしっかり見ている人なんだなと感じました。現場人間って疑問を持たなくなってしまったらおしまいですが、岡村さんはずっと悩みながら生きている人なんだなと、ぼくと同じ匂いを感じましたし、一つのチームとして信頼が生まれた夜だったなと思います。

レオの髪型のカツラで遊ぶ滝沢達史と土谷享

土谷　まさに奇跡的な出会いでしたね。そんななか、ぬかさんのところで「なんでそんなんプロジェクト」が動いていたことも奇跡だったと思うんです。プロジェクトが始まった経緯を改めて教えていただけますか？

丹正　『レオの髪型』のレオさんが、ある会議のときに「アンデパンダンという言葉と、『なんでそんなん』という言葉が似ている」という話をしたんです。

ぬかの事業所のなかでは「なんでそんなことするの？」と言いたくなるでき事が多々あって、それに対して突っ込みを入れて日々面白がっているんですけど、そんな『なんでそんなん』が集まるアンデパンダン展ができたら面白そうだね、という話がそこから始まりました。

アンデパンダン展というのは無審査・無資格の展覧会ですが、いわゆる表現や芸術としてつくられた作品だけではなく、ぬかでいえばレオさんの髪型であったり、人がちょっと困るようなものを持ってきて扉の前に置くといういたずら心の行為であったり、そういった取るに足らないことを集めて企画ができればな、と考えました。

『ガムテープのタネ』展示風景

さらに、企画を詰めていくうちに、ぼくたちは展覧会をしたいわけではなく、そういう理解不能だと思われる行為をする人の“周りの人”、つまり、「発見者」を増やしていくことが、このプロジェクトのポイントだと感じました。

色んな発見者の視点やまなざしをオンラインで集められたら良いなということで、2020年9月にホームページを起ち上げて投稿を呼びかけ、2021年4月時点で約110の事例が集まっています。

土谷　プロジェクトの特長として、作品やアートではなく「事例」と言い切っていますよね。その狙いや真意について教えてください。

中野　自分たちが追い求めていたのは、おそらくアート的な作品に至っていない、表現までもいかないものだったんです。それこそ、その人の癖だったり、こだわりだったり、はたまた家庭のなかで起こる些細な行為を集めることとしていたので、事例という言葉を使いました。

土谷　アート側の人間としては、日常のなかでの特異なふるまいや行動を「アート」と言い切ってしまうことの危うさみたいなものは感じています。アートと括った時点で思考が停滞してしまうんじゃないかと。そこを上手くかわす意味でも、「事例」という言葉はマストだったと思います。

例えば、インスタレーションのなかに『ガムテープの部屋』がありましたが、展示ケースのなかにガムテープの種を入れるとアートになり、床に転がっていると行為の集積物になり、ベッドの上にあれば抱き枕になる。誰でも入れ替えられる展示になっていたんだけど、あの展示は「事例」を象徴するものだったなと思っていまして。アール・ブリュットなど、ある種の括りが設けられている障害者芸術の世界に対しての批評性も読み取れるように思いましたが、滝沢さんの狙いはありましたか？

滝沢　障害者芸術が盛んになり、アールブリュットが盛んに言われるようになって、障害者がどんどん社

会に出てくることはとても喜ばしいことなんですけども、一方で、作品をつくることができない障害者はどうなるんだという問題があると思うんです。そして、ぼくたちの役割は、そこかなと思っています。作品をつくれない・なにもできない。では、その人に価値はないのか？　というところに価値を見いだしていく、そういった思想を広めたいと考えています。

『ガムテープの部屋』について、先ほど土谷さんは床にあるのは集積物だと仰っていたけども、ぼくは「ゴミ」だと思っています。家庭では障害者がつくった造形物に保護者が困っていたり、施設の職員さんや学校の先生たちは「こんなものばかりつくって」と呆れているケースが見受けられます。その象徴としました。

しかし、つくっている側としては作品ではなく自分のそばにあって、日々触るものです。そういう距離感で接することができるよう、ベッドの上では抱き枕として愛でる対象としました。そして、ケースに入れると「作品」になる。あの部屋では、その三つのカテゴリーに分けているんです。

美術館ではなくホテルであったり、作家ではなく発見者と行為者という名前であったり、いわゆるアートブリュットやアートの文脈とは違うところで、何かを生んでいけないかというチャレンジだと思っています。

なんで「エキスポ」やったん？
なんで「アワード」決めたん？

土谷　では、展覧会ではなくエキスポ（博覧会）にしたのは、滝沢さんのなかでどういう思惑がありましたか？

滝沢　まず、場所について、ショーケースに入れると美術作品になってしまうので、美術作品にならない場所を探していました。そこから、展覧会と呼んでしまっては本末転倒になるので、何か良い名前はないだろうかと考えていたんです。そこで丹正さんが「エキスポってどうですか？」と言って、それ良いじゃんとなったんです。

エキスポは博覧会。博覧会はややマイナスな過去もあるように、集める側のエゴイズムで陳列する危険な要素も含んでいるんですが、それが許されるというか、危険だけどギリギリお祭りのカオス感に包まれるんじゃないかと直感的に思ったんです。丹正さんはどうでしたか？

丹正　ぼくも同じです。エキスポについては大阪万博のイメージが強く、話を聞いたり本を読んだりした印象として、雑多なものを受け入れるイメージがありました。

展覧会や美術展と言ってしまうと、そこに置かれたものは美術作品になってしまいますが、博覧会だともう少し間口が大きくて、受け皿も広く、それが向いているなと感覚的に感じました。

滝沢　今回の展覧会を行う上で大事なポイントだったのは、オリンピックという象徴に向けてのパラリンピックやアールブリュットが集約されていく風潮に対して、ぼくなりの意見を言いたかったというのが、まず一つとしてあります。

もう一つが、コロナ禍であるということです。コロナ禍において、誰もがどこへ向かえば良いのかと真面目に考えているんだけど、底抜けに面白いものの“笑い”で吹き飛ばす、そんなものが今は必要なんじゃないかなと思ったんです。

なんでそんなん大賞審査員の皆さんとパピリオンガールの久保田沙耶さん

それがエキスポであれば許される気がしました。展覧会だとおそらく「不謹慎だ」と怒られちゃいそうなことも、エキスポならギリギリかわせるかな、と。

土谷　ぼくは、このチャレンジに対して批判や批評などを通じてネガティブな意見も聞こえてくるかなと、少し思っていたんです。それどころか、かなり好意的に捉えてもらえましたね。

中野　批判的な言葉は全くなくて、むしろやりやすかったですね。

滝沢　面白がってくれる人だけが観てくれたかなと思います。

土谷　今回のエキスポでは受付要員として久保田沙耶さんが見守ってくれていましたが、監視員じゃなくて、そこにもアーティストを入れてしまう視点の変え方もすごいなと思いました。久保田さんを選んだ経緯を教えてくれますか。

滝沢　エキスポって夢があるものだから夢のある造作をつくりたいなと、丹正さんと話をしていたんです。でも、すごくお金がかかるから、なかなかたどり着けない感じがしたんです。

そのときに、キャラクターがいれば造作に力を割かなくても良いかなと発想の転換がありました。実際起用してみたところ、思いの外功を奏しまして。久保田さんに尽きるというか、大当たりだったなと思っています。

紹介する人が役者であると、メディアに出る写真一枚とってもすごく華やかに伝えられるんだなと自分でもすごく勉強になりました。

土谷　アンデパンダンという無審査、無賞の考え方を引用しているのに「なんでそんなん大賞」というアワードを設けた、その理由を教えてください。

中野　橋本財団さんから助成を受けるにあたって、何度も説明をしに行ったんです。そもそも、「なんでそんなん」ってなんなん？と（笑）　どう説明して良いのが分からないと言われるわけです。何度もディスカッションを繰り返して、やっと理解してもらえた。それぐらい「なんでそんなん」って、何か分からないんですよね。

ホームページで事例の投稿募集を開始しても全然集まらないなかで、大賞があって賞品があったら集まるんじゃない、というすごく安直な考えからアワードをつくったんです。それでも集まらなかったので、結果的にエキスポに助けられたところはあります。

丹正　「なんでそんなん」が、未分類で理解しがたい行為を集めているものなので、秀逸だったり、何かが優れているものが選ばれるかどうかは分からないという、不思議なところはあるなと思います。理解できないものこそ、大賞にふさわしいのかもしれない。大賞になればなるほど意味不明ということになったら、グランプリを逆説的に捉えられる。そういうところにも面白みを感じました。

審査員のみなさんも、予想していた以上にディスカッションをしてくれて、それぞれの視点で選んでくれたことがすごく嬉しかったです。審査会について、滝沢さんにお話を伺いたいです。

滝沢　ぼく個人の記録にも残したぐらい、審査会はすごく面白かったです。

審査員の方が選定理由を話したときに、「なるほど、そういう視点もあるな」と感じることが多かったし、人それぞれの「なんでそんなん」があるということが豊かだなと思いました。

また、その時その時で何が大賞に選ばれるのか分からないのが良いなとも思いました。審査員の人を変えてまたやりたいね、という話もありました。

土谷　ぼくも一歩下がったところから見させてもらっていたけど、本当に言葉を選んで紡ぎ出すように議論を重ねていて、あんなに素晴らしい審査会は見たことがなかったですね。

滝沢　審査員の柳沢さんが「作品を見る前に決めよう」と言っていたのが面白かったですね。

作品の力や展示の空間によって元々の発見者の視点と違ってきてしまうから、純粋に、全部並列に、発見者と行為者の面白さから選ぼうと言ってたのが、素晴らしいなと思いました。

土谷　事例を展示する時点で、滝沢さんのある種の編集が入っていますからね。そこのフィルターを取り除いて、みんな本質を見るんだ！ってね。

丹正　展示がうますぎるからダメだよって言ってましたね(笑)

土谷　審査の難しさとか、出資者への説明の難しさとか、「なんでそんなん」を伝える難しさは、これからも付き合っていくものだと思うんですが、展示を振り返ってぼくは「なんでそんなん」はコンピューターに例えるとOSなんじゃないかと思ったんです。

例えば、コンピューターにOSが入っていなければ、いくら便利なアプリケーションが入っていても、インターネットが接続されていても、キーボードで何を操作しても、ただの黒い画面のついた箱なんです。でも、そこにOSが入れば情報の受け渡しができるようになる。

「なんでそんなん」というOSも、「なんでそんなん」を理解した時点で、つまりインストールされることで、普段は位置づけられないものやその情報が、初めて受け渡し可能になる。

さらに、このOSにはいろんな拡張子が付けられるわけです。ホテルっていう拡張子もバッチリだったと思うし、エキスポっていうアプリケーションとも互換性が良かったですし、アワードというものもプラットフォームとして機能したんじゃないかと思います。

今回の「なんでそんなエキスポ」を通じて、“なんでそんなんOS”の互換性や柔軟性が実証されたんじゃないかなと思いました。

中野　すごくありがたい言葉ですね。

土谷　“なんでそんなんOS”って言い切ってしまって良いと思いますけどね。

そうすれば、「うちの事業所にも“なんでそんなんOS”をインストールしてみよう」って、実装してくれるところが増えると思うんです。

丹正　インストーラーが要りますね。

土谷　インストーラーの一つとして支援センターが機能することができるのではないでしょうかね。

1.『ハルマキ』　作者:石橋明花／発見者:ぬかスタッフ
2.『傾斜角マイケルなみ』の会場で行われたダンスパフォーマンス
3.『絵本トラップに気をつけろ!!』　行為者:SORAJI ／発見者:母
4.『太陽の塔 量産型』　作者:かんちゃん／発見者:ジョー
5.『レオの髪型』のカツラを被るパスレルスタッフ
6.『補強したカッター机』　行為者:辻野正三／発見者:福岡知之
7.『朝の紙』　行為者:母ちゃんの息子／発見者:母ちゃん
8.『ガムテープのタネ』行為者:村木実乃里／発見者:ぬかスタッフ

本当に必要な支援センターって、どんなん？

土谷　それではここからは、エキスポを通じて、支援センター・パスレルとして感じたことや質問にうつっていきたいと思います。

岡村　岡山県に支援センターが設置されたとしても、ぬかさんやホハルさんのようにエネルギッシュに活動されている事業所に対して支援できることは少ないのかもしれないと思うのですが、ぬかさんやホハルさんなら支援センターにどんなことを期待しますか？

滝沢　そもそも支援センターの周知率が低いと感じますね。支援センターが役に立っていないのではなくて、知られていないところが問題だと思いますね。

土谷　厚労省のアンケートでも認知度は3% という結果が出ていますね。

滝沢　そこが30% になったら良いんじゃないかと思います。そうすれば困った人が相談に行くし、そのニーズに応えていけばおのずと何が必要なのかはブラッシュアップされていくと思います。

現状の問題は、困っている人たちが相談するところがあることを知らないで、つながっていないないということじゃないでしょうか。重要な事業なのに広報が下手すぎる印象はあります。

岡村　確かに、どうやって広報していくのかは、各支援センターに課せられた課題だと思います。

岡山県に支援センターは、ないよりもあった方が良いですか？

中野　ぼくたちのやりたいことは、ターゲットが障害者だけじゃないんです。障害あるなしに関わらず、障害者を自然な形で混ぜたいというのがぬかのコンセプトでして、「なんでそんなんエキスポ」を企画する際にも、そのコンセプトでやって良いのかを確認したと思います。

障害者文化芸術普及支援事業という言葉がまさにそうですが、岡山県にできる支援センターは障害者、健常者という枠を外した考え方のものができて欲しいと思っています。障害者に特化するのではなく、注目するべきものは「人」そのもので、その中に 障害者もいれば、健常者もいるという考え方のほうが良いと思っているので。

岡村　なるほど。

「なんでそんなんプロジェクト」は、“発見者と行為者”というセットで事例を取り扱っているのが特徴ですが、やっている行為は一見迷惑な行為であったり、問題行為に移ったりするようなことであっても、発見者の視点を変えることで愛でる行為となりますよね。それって障害者支援をしていく上でも、また、それだけでなく人と関わる上でも、裾野を広げていく取り組みだと思います。どこまで計算されていたのか？それとも副産物として生まれたことなのか？お聞きしたいです。

丹正　発見者のなかにもいろいろな人がいると思うんです。例えば、美術の世界では批評家がいたり、広く社会を切り取っている人もいます。発見者として情報発信に長けた人もいっぱいいると思うんですけど、教育や福祉の現場や、はたまた家族や夫婦、家庭のなかにいる人が、日常のなかかから面白がって発見して、自分なりにタイトルを付けて自己編集を行うなど、“市井の編集者”が生まれてくると良いなという狙いはありました。

大きな声では言ってないし書いてもいないんですが、そこが「なんでそんなんプロジェクト」の意義だと思っています。

宇野港から望む HYM hostel

岡村　優しさや愛でる感情はぼくにもあったんですけど、しばらくなりを潜めていたんです。でも、今回のエキスポへ行ったことによって思い出したというか、より顕在化してぼくの支援や人との関わり方まで変えてくれたなと思っています。

中野　なかなかそういう風になれないという実情も踏まえてですが、「なんでそんなん」と突っ込んで、許してもらえるような実践を、もっと現場で広げていけたらいいなと思いますね。

滝沢　瀬戸内国際芸術祭を回ると、その後何を見ても作品に見えてくるってみんな言うんですね。その辺に置かれている一輪車がアートに見えてくるんです。

「なんでそんなんエキスポ」も見た後に、帰りの電車や家のなかで「あ！これは『なんでそんなん』や！」っていう風に、目線が変わってくると良いなと思ったんですよ。

『傾斜角マイケル並み』という作品を見たぼくの甥っ子と姪っ子が、真似する遊びを始めたんです。こういうのって不謹慎だと怒られると思うんですが、ぼくはこれがすごく良いなと思ったんです。子どもにとって「障害者に優しくしなさい」と教えられたり、「障害者の真似をしたら不謹慎だ」と怒ったりすることって、逆に距離ができてしまうと思うんです。

こういう風に子どもが子どもらしい目線で面白がれる、ごく自然な接し方が生まれたら良いなと、この甥っ子姪っ子達の写真を見て思いました。

「なんでそんなん」の事例を見たり、エキスポに来たりすることで、自分の生活に返ったときに「なんでそんなん」が見えてくる・楽しくなる……そういう効果が生まれると良いなと思っています。

『傾斜角マイケル並み』を真似する滝沢氏の甥っ子と姪っ子

これからどうするん？

土谷　これから「なんでそんなん」をやっていきたいと考える事業所もあると思うんですけど、そういった方々の“入口”はありますか？

丹正　プロジェクトとしては年に二回ぐらいオンラインセミナーを公募型で開催しようと考えています(2020年度は実験的に福祉職員向けオンラインセミナーを開催しました。1コマ2時間 / 全3回 /6施設11名が参加)。そういったセミナーが一つの窓口になればと考えています。ですが、先ほどの土谷さんのお話で言うと「なんでそんなん」そのものはOSなので、ホームページなどを見て、「あっ、これも“なんでそんなん”か！」と感じてもらい。それぞれ勝手に「なんでそんなん」を実践していただけたらとも思っています。

始めるにあたっては、記録することが大切だと思います。「なんだこれは！」と思うものに出会った時、何になるか分からないけれど、とりあえず写真に撮っておく・とりあえずメモしておく。とりあえず記録することが「なんでそんなん」を楽しむ“コツ”だと思います。記録しておくと、後で他の人と共有できますしね。

土谷　最後に、今回の「なんでそんなんエキスポ」に応募された事例ってビジュアルイメージのもの多かったかなと思うんですけど、音楽の専門家から一言あるようなので……。

北添　今回のエキスポを通して、自分も幼いとき、父親から「お前、粘土作りしているときのメロディと鼻歌がエラいことになっているけど、自分で気づいているか？」と言われたことを思い出したんです。「なんでそんなん」に関わると、関わった人すべてに受容体みたいなものが生まれてくるなと、その後の生活の中で感じているところです。

それで、『オボットくん』の展示会場で行為者のハルタニさんの鼻歌を流していて、それによってさらに作品にのめり込むことができて、音の展示も良いなと思ったんですが、そういう面白い音も募集されませんか？

また、やっていくうちに自然発生で生まれるんでしょうけど、その音で遊んでみよう、みたいな企画があっても面白いなと思うんですが。

丹正　最初にホームページをつくるときに、サーバーの関係もあって映像を集めると大変かもということで、とりあえず写真にしたんですね。

ただ、映像を添付させてほしいという希望はあって、YouTube に上げてもらったものをリンクを貼って見られるようにしたものが一件あります。
今は確かに言葉と写真だけなので、ちょっと違う項目も集められるようなプラットフォームを作れたらいいなと、今のお話を聞いていて思いました。

岡村　「なんでそんなんエキスポ」が終了し、時間が経ちましたが、改めて話をするとその時の感情を思い出して、また頑張ろうかなと思える。素晴らしい仲間に出会わせてもらえたエキスポでもあったなと思います。今回だけでなく末永くお付き合いしていただけたらなと。引き続きよろしくお願いいたします。本日はありがとうございました。

企画名：なんでそんなんエキスポ

会期：2021年2月6日（土）～2月21日（日）
時間：12:00～17:00（最終入場16:30）会期中無休
会場：HYM hostel（岡山県玉野市宇野1-7-3 東山ビル）

ディレクター：滝沢達史
共同ディレクター：中野厚志

主催：NPO 法人脳損傷友の会高知青い空／中国・四国 Artbrut Support Center passerelle（パスレル）
企画協力：ぬか つくるとこ／株式会社ぬか
協力：HYM hostel ／ホハル／ぬか つくるとこ／久保田沙耶
後援：玉野市
※本事業は厚生労働省 令和２年度障害者芸術文化活動普及支援事業の一環として実施しています。

なんでそんなんプロジェクト
https://nandesonnan.com

オンラインで開催した座談会の様子

僕は明日の過去である

岡村忠弘

「脳卒中右片麻痺患者の手指による模倣能力は有意味形態と無意味形態で異なる」

これは医療機関での臨床時代に、高次脳機能障害に含まれる症状のひとつである失行症（簡単な模倣、使い慣れた道具が使えなくなる障害）を呈した症例に対して行った研究のタイトルです。手指の模倣形態によって、模倣完了までの時間や達成度に差が生じるのかを検証した研究でした。高次脳機能障害のある患者さんが呈する病態を治療することに意義を感じ、臨床と研究に没頭した時代がありました。

そういった臨床や研究の経験を繰り返すうちに、高次脳機能障害がある人の退院後の生活や就労の支援に関わりたいという気持ちが大きくなり、障害福祉の世界に飛び込みました。ある種の勢いも加わり障害福祉の世界に飛び込んではみたものの、そこに待っていたものは決して心が躍るだけの世界ではありませんでした。高次脳機能障害が原因で生きていくことに苦慮している方々を身近で感じ、どのような関わりが最善なのか悩み、支援力の無さを痛感する日々が続きました。

日々の支援で関わった1事例を紹介したいと思います。

数年前に事故で脳を損傷したＡ氏には奥さんがいたが、事故後、離婚し、奥さんは2人の幼い子どもを置いて家を出たとのことであった。Ａ氏の自宅を初めて訪問した際、正直言って驚きを隠すことができなかった。Ａ氏はコタツの中に入ったきりで動くことはなく、コタツの上には吸殻の溜まった灰皿、スナック菓子の袋やクズが散らばっている。掃除がされた痕跡のない小さな暗い部屋で、小学校低学年の女の子と保育園年中組の男の子が遊んでいた。

現状を把握することが優先事項だと考え、家事援助の目的で訪問ヘルパーを導入し、家庭内の状況や休日の状況、Ａ氏の言動をできるだけ細かく把握し教えてほしいということを伝えた。数日間でおおよその状況は掴めた。生活保護や扶養手当などで一定の収入はあること。しかしその収入のほとんどはＡ氏がパチンコに行って使ってしまうこと。Ａ氏が、お金の管理は自分がすると言い張っていること。食材を買うお金が無くなった時、近所の人や親戚、保育園の園長先生らに何度もお金を貸してほしいと交渉していること。子どもたちは数週間、お風呂にも入っておらず、衣服もほとんど着替えていないこと。小学校低学年の女の子には持病があり、定期的に病院受診をして薬を飲まなくてはいけない状況であること。子どもたちが丸一日何も口にしない日があること。Ａ氏は、感情をコントロールできない時があり、ダメなことだと分かっていながら、時々、子どもたちに手をあげてしまうこと・・・。

頭の中で様々な思いが巡り、数日間、悩みながらも相談支援を継続していた。

ある日、ヘルパーさんから日曜日の生活に関する報告があった。朝にご飯を作ったが、子どもたちはそのご飯を食べようとしない。子どもたちに「なぜ食べないのか」と聞いても答えない。昼がすぎ、ヘルパーさんがもう一度、子どもたちに聞くと「これは夜のご飯だから…。食べないようにと（父親に）言われているから…。」と言った、という報告だった。

この報告を聞いた瞬間、Ａ氏の支援よりも、まずは子どもの命が優先だと思い、私たちは躊躇なく児童相談所に連絡を入れた。この決断が正しい決断だったのかどうかは今でも分からない。児童相談所に連絡すると、「その情報だけでは動けない」というようなことを告げられた。私たちは、「どのような情報があれば動けるのかを教えて下さい」と頼み込み、児童相談所の協力の下、情報収集をしながら支援を継続した。それから数ヵ月、状況把握をした児童相談所は、子どもを保護するという結論を出した。保護当日、Ａ氏もある程度の納得はしており「すぐに迎えに行けるように頑張るからね。」と子どもたちに話をしていた。

この時私は、Ａ氏が子どもたちに対して行ってきたことは、虐待に位置づけられるということは理解できました。しかしながら、この虐待はＡ氏がしている虐待なのか、それとも障害がさせている虐待なのだろうか、もしかしたら社会全体の仕組みが招いた虐待なのではないだろうか、車に乗り込む子どもたちを見送りながら、そういった問いが頭をぐるぐると駆け巡り、私は混乱していました。

このような経験をしていく中で、私たちは支援という名のもとに、いったい何をしているのか、ということをいつも考える癖がついてしまいました。現在進行形で、障害の影響で生活に苦しんでいる当事者をみかける度に、この悶々とした感情が蘇ってきます。

そのような感情を抱えながら支援をしている時に障害者の芸術文化に出会いました。埼玉県の秩父で行われた、ジャパン×ナントプロジェクト2017の全国巡回プロジェクトで公演した瑞宝太鼓を観覧したことが障害者の芸術文化との最初の出会いでした。この公演を観覧した時に、日々支援をしている高次脳機能障害がある人の顔が次々と浮かんできました。障害特性上、芸術や文化に触れる機会が圧倒的に少ない高次脳機能障害がある人にも、このような経験をしてもらいたいと心から思いました。この出会いを皮切りに、たくさんの作品や舞台を鑑賞し、芸術や文化に触れ、そこから多くの刺激をもらい、支援への考え方が変化していきました。同時にその刺激は、多様性を認めることや、共生社会という概念など、様々な気づきを与えてくれました。

そうして無意識に、自分が考える社会という枠組みに、障害がある人をむりやり当てはめる支援をしてきたかもしれないと自省するようになりました。今までにあまり意識してこなかった「普通」や「平均」という言葉を自分なりに考えるようになりました。「普通」とは世に存在する様々な事象の平均値から「普通」というものを捉えているのではないかと考えるようになりました。平均値の差異から優劣をつけ「自分は普通である」「あの人は普通じゃない」といった判断をしているのではないかと考えるようになりました。平均というものは単なる数値であって人生や生き様に平均値や普通などというものは存在しないということすら思うようになりました。

今、振り返ると、医療従事者時代の私は、臨床や研究を通して、ヒトを量や時間などで推し量り、比較や分類をし、眼前に生々しく突きつけられる病態をなんとか解釈し、折り合いをつけようとしてきました。

現在、その頃の自分より、よく涙を流すようになりました。障害がある人の作品から感じ取れる人生や生き様に惹かれ、障害者の芸術文化に触れることで自分の中にある価値観は大きく変化しました。そして今もなお、比較のない自由な世界観は私を魅了し続けています。

Tadahiro Okamura

中国・四国 Artbrut Support Center passerelle センター長。1978年高知生まれ、高知県在住。急性期・回復期病院で臨床経験を積み、その後リハビリテーション養成校での教員を経て2014年に NPO 法人脳損傷友の会高知青い空に入職。現在は高次脳機能障害者支援と障害者芸術文化活動に関わる。

ふらっと Flat

新型コロナウイルス感染症拡大の影響により対面での会議や訪問ができなくなったことを契機に、行政･支援センター･福祉事業所の誰もが気軽に参加できる Zoom によるオンラインミーティング「ふらっと Flat」を 3 回開催した。回を重ねるごとに参加は増えていき、気軽に質問をいただけるように変化していった。

第 1 回（R2.7/28）　10：00 ～ 16：00 で開催
第 2 回（R2.9/25）　10：00 ～ 16：00 で開催
第 3 回（R2.12/7）　10：00 ～ 16：00 で開催

厚生労働省 令和 2 年度障害者芸術文化活動普及支援事業
中国・四国ブロック　障害者芸術文化活動広域支援センター
『中国・四国 Artbrut Support Center passerelle』

センター長｜岡村忠弘
プログラムオフィサー｜津野雅人
芸術文化活動支援コーディネーター（舞台、音楽）｜北添紫光
芸術文化活動支援コーディネーター（美術）｜土谷 享

令和 2 年度事業報告書『Passerelle Report』

発行｜中国・四国 Artbrut Support Center passerelle
編集・デザイン｜タケムラデザインアンドプランニング
写真｜井戸宙烈（表紙、p43、46、48 ～ 54）、なんでそんなん事例写真は各投稿者（表見返し、裏見返し）、その他の写真は各執筆者提供によるもの

座談会編集｜高橋さよ
座談会協力｜滝沢達史、中野厚志、丹正和臣
協力｜あいサポート・アートセンター、アートベースしまねいろ、愛媛県障がい者アートサポートセンター、徳島県障がい者芸術・文化活動支援センター、広島県アートサポートセンター、藁工ミュージアム 分室、岡山県保健福祉部障害福祉課、香川県健康福祉部障害福祉課地域生活支援グループ、山口県健康福祉部障害者支援課
発行｜ 2021 年 3 月 31 日

NPO 法人　脳損傷友の会高知 青い空／中国・四国 Artbrut Support Center passerelle
住所｜高知県高知市塩屋崎町 2 丁目 12 － 42　2F
TEL ｜ 088-803-4100
FAX ｜ 088-803-4420
E-mail ｜ passerelle@blue-sky-kochi.com
Web ｜ https://asc-passerelle.com/

『オボットくん』
行為者：ハルタニ（3歳・♂）
発見者：父
なんでそんなんプロジェクトより